

第五章 玉篇の體貌

1 收字の範圍

顧野王の原本が完存せざる今日に於て、其の所收の文字の數を知るべきは僅に唐の封演の聞見記に

梁朝顧野王の撰べる玉篇三十卷凡そ一万六千九百一十七字

といへるもの有るのみ。

そも／＼漢土各時代通用文字の數を知るべきもの、先づ漢書の藝文志に

史籀十五篇周宣王の大史、大篆十五篇を作る、建武の時六篇を失ふ

蒼頡篇上七章は秦の丞相李斯の作 爰歷六章は車府令趙高の作 博學七篇は大史公胡毋敬の作

漢興りて閭里の書師、蒼頡爰歷博學の三篇を合せ、六十字を斷ちて一章となせるもの凡そ五十五章を并せて蒼頡篇となしき。武帝の時に司馬相如、凡將篇を作りしが復字なかりき。元始中に楊雄、訓纂篇を作りて蒼頡に順續し、又蒼頡中の重複の字を易へて凡そ八十九章あり。

とあり。此の史籀篇と蒼頡篇との關係を明らかにするには説文の序を引くべし

秦の始皇帝初めて天下を兼ねるや丞相李斯乃ち奏して天下通用の文字(上文に「其の後諸侯力政、王に統べられず、言語声を異にし文字形を異にし」とあり)を同じくし、其の秦の文と合はざる者を罷めんとして、斯は倉頡篇を作り、中車府令趙高は爰歷篇を作り、大史令胡毋敬は博學篇を作る。皆史籀の大篆を取りて或は頗る省改せるものにて所謂る小篆なり。即ち史籀篇は古文の教科書、倉頡等三篇は小篆の教科書にして、史籀篇の内容は適當に倉頡等三篇に攝取せられたれば、皆史籀の大篆を取りてとは云ひけん。而して此の三篇の文字は每章六十字のもの五十五章と云へば三千三百字にて、當時使用のあらゆる文字は該ねずとも標準たるものは洩らさざりしなり。

漢興るの初は此の三千三百字にて足りしに、一百三十年を経たる宣帝の代には此の中に日常の用たらぬものを生じたれば、藝文志に又

蒼頡に古字多く俗師その讀を失る。宣帝の時齊人の能く正しく讀む者を徴す、張敞從つて之を受く。

と有り。俄に古字が多くなりしに非ず、日常に用ひねば古字となれる迄にて、其の反面には新に用ひらるゝ文字の起れるや論なし。之を證すべきは同志に

武帝の時司馬相如、凡將篇を作れるに複字なし。元帝の時黃門令史游急就篇を作り、成帝の時將作大匠李長、元尚篇を作る。皆蒼頡篇中の正字なり。凡將は頗る出づる所あり。

と有りて宣帝に前だつ武帝の代に成れる凡將篇が從來の蒼頡篇以外の文字を收めたるを云へる者是なり。又急就、元尚の二篇が蒼頡篇中の正字にてありながら新に出でたるは、時代は蒼頡篇のまゝの内容を置去りにしたる故ならずや。宣帝の初より又八十年平帝の元始中に天下の小學に通じたる者を徴して文字を未央の庭中に説かしめられ、黃門侍郎楊雄その用ある者を取りて訓纂篇を作れるが、その訓纂篇はすべて八十九章ありと云へば蒼頡三篇の五十五章よりも三十四章多く即ち二千四十字の増加にて前漢二百年は過ぎたるならん。

後漢興りて七十年なる和帝の時班固は更に十三章を、賈魴は三十四章を續ぎたりと稱せらる。然るに此の時蒼頡三篇の五十五章を上卷、楊雄の訓纂篇三十四章を中卷、賈魴の滂熹三十四章を下卷として三倉と稱へられたりと云へば班固のは下卷の中に在りしかと云はる。此の見方に従へばこの七十年に更に賈魴の三十四章即ち二千四十字を増したることとなり、其の字數前漢三百年間の増加のと同じきは多きに過ぐる如くなれど、其の和帝の末に起艸せられし許慎の説文解字が既に九千三百五十三字を收むに比すれば、三倉の百二十三章七千三百八十字もその網羅の範圍は廣からざりしなるべし。説文が此くも文字多き所以いかん。錢大昕の説文答問に

問ふ許叔重の説文解字十四篇九千三百五十三文にして經典に見えぬもの幾ど十の四、文多くとも用に適せざらんは窃に未だ喻らざる所

曰はく今世に行はるゝ九經は乃ち漢魏晉儒の一家の學のみ。叔重は東京全盛の日に生れて諸儒の講授して師承の各々別なるものをも悉く能く通貫せる故に、經師の異文に於ては采摭尤も備はりしにて、今人の隱僻の字と視なす者も大率經典の正文なりしなり。經師の本に互に異同あれば叔重は其の古文に合へる者を取りて經と稱して之を顯し、其の文は異なれど義の通すべき者は亦兼ね存したればなり。

と云へる者その實を得たるべく、通用文字としては一字にて可なるものも數形を收めたる一二を云はゞ、普通には確乎、確然など用ゆる確もまた塙乎に作り霍然に作れば俱に之を引き、更に又砮や礪を録し、普通は方鳩僞功と鳩字を用ふるものも其の本義句字をよしとすれば亦之を録したる類是なり。

三國に入りては魏の左校令李登に声類十卷ありて、封氏の聞見記に其の字數を一萬一千五百二十字と云へり。清の陳鱣は其の聲類拾存に叙して

說文に較べて二千一百六十七字を増多せる故は說文にては本、一の𠂔字なりしに、此には別に吼、𠂔、𠂔の三字を出して皆𠂔なりと訓じ、說文にては本、一の𠂔字なりしに此には別に𠂔字を出すなど蓋し佛書盛に行はれて僞體雜見せるなり。

と述べたる如く、實にや佛教の盛行は寫經の風習を起し、此の事たゞ文字の社會化となりて異體の紛起を見たるも亦已むを得ざりしならん。且や說文の一書すでに博きに誇るの風

あれば後出の物自ら之を承けて收字の激増するも自然の數なるべし。

聞見記は上文の次になほ

晉に呂忱ありて字林を撰ぶ、七卷亦五百四十部(慎吾按するに說文も五百四十部なれば)亦といふ、凡そ一万二千八百二十四字。後魏の陽承慶復た字統二十卷を撰ぶ、一万三千七百三十四字(この次に上に引ける玉篇の記述あり)

と云へり。呂忱は晉の何時頃の人なるかを知り難きが、魏書江式傳に「義陽王の典嗣令任城の呂忱」とありて其の義陽王は安平獻王の子なる義陽王司馬望ならば晉の宣皇帝司馬懿の甥にして太始元年に王となりその七年に薨じたる人なれば、忱を太始中の人とするも不可なからん。陽承慶は梁の簡文の初年に生存したるべくして顧野王と殆ど同時代。今姑く李登を魏代四十五年の中央におきて此等を計ふれば

說文より声類まで一四〇年間に文字の増加二一六七

聲類より字林まで二九〇年間に一三〇四

字林より字統まで二九〇年間に九一〇
玉篇まで四〇九三

の表となすを得べく、以て玉篇の收字のいかに豊富なりしかを知らるゝなり。

聞見記に云へる字數は孤證たるの嫌あれども之を信受すべき他の理由なきに非ず。宋本

玉篇の本字を通計するに二二七八四字なり。今現存せる原本に一部の字數を出せるもの五二部その本字一五八五字たるに、此の五二部の宋本の本字は二二九一字にして原本よりも約四割四分の増加なり。よりて宋本の本字總數即ち二二七八四字より四割四分を減すれば一二八〇〇字を得べく、聞見記のいふ所とは四一〇〇字の少數なれど原本は次にいふ如く或爲の體を收むること極めて多きを以て字數は多かるべき理あるなり。

2 或 爲

原本玉篇に於ける特殊の現象として或爲を擧ぐるを得べし、いふ意は某字につきて或爲某もしくは亦爲某と註すること多きこれなり。今二部以上に亘れるもの又は數部互見の一二を擧げん。

謳	或爲謳字在口部	或爲謳在心部	
訝	亦爲訝字在迎部	亦爲訝字在手部	爲訝字在木部
𦣻	或爲𦣻字在言部	或爲𦣻字在頁部	或爲𦣻字在心部
古文爲𦣻在𦣻部			

次のは字𦣻の或爲を云はねど他部に在りと云へば畢竟はその部首に从へる字たるべきなり。

𦣻 野王案するに此の字の類甚だ多く音皆相似たり、

人心に伏合するの𦣻は音於閃反、𦣻字となして尸部に在り、

鎮恭の𦣻は音於甲於涉の二反、𦣻字となして土部に在り、

安靜の𦣻は音於監反、𦣻字となして心部に在り、

𦣻着按持の𦣻は𦣻字となす、音於𦣻於𦣻二反、𦣻字に在り。

今此等の文字を考ふるに

謳を謳に爲るは荀子の呪謳之の注に與謳同とあり。謳に爲るは慧琳一切經音義に謳歌也、喜也、吟也とあるものか。

訝を訝に爲るは説文の或𦣻。訝は儀禮聘禮の訝受几于筵前の注に今文訝爲梧とあるを顧野王の見たる本は手に从へるか。訝は説文に一日車輶會也とありて考工記輪人に牙也者以爲固抱也の注に鄭司農云牙讀如訝とあるに由あらん。

𦣻を𦣻に作るは漢書韋賢傳𦣻々黃髮を文選諷諫詩に𦣻々に作れるもの。𦣻字は類篇に恭嚴也とあれば通用するか。𦣻に作れるは三國志名臣序贊の注に史記を引きて不如十士之𦣻々也とあるもの。𦣻に作るは周禮占夢の噩夢の注に當爲驚𦣻之𦣻とあるものなるべし。

𦣻の伏合人心は蒼頡篇に出でたること大方等大集經音義等に見え、鎮恭の恭は𦣻の筆誤にて𦣻鎮也、𦣻也も亦蒼頡篇に見えたること阿毗達磨俱舍論に見ゆ。説文に又𦣻字あ

りて安也於鹽切と云へるもの即ち安靜之狀にて、監は恐らくは鹽の訛ならん。又歴ありて一指按也於協切とあるもの即ち厭着のと知らる

にして顧氏のいふ所の信にして微あるを知るべし、又此く或舛の多きは天下同文の化たえて意の近きまゝに偏旁を變易しては使用したる結果にして之を會通するは字書至要の職務たりしならん。

3 音 切

孟子曰はく

一齊人之に傳へて衆楚人之を咻せば日に撻ちて其の齊たらんことを求むとも得べからじ。引いて之を莊嶽の間に置くこと數年なれば日に撻ちて其の楚たらんことを求むとも亦得べからじ。

と、これ正に齊楚の語音の同じからざるをいふ者。而してその實例は穀梁傳の襄公五年に（經）吳に善稻に會す（傳）吳には善を伊といひ稻を緩といへども、號は中國に従ふなり、名は主人に従ふものとす。

とあり。蓋し會合の地、吳にては伊緩と呼べとも、號は中國に従ふものとして善稻（左氏には善道に作る）と書したりとの意なれば、吳と中國との言語の異なりしや明けし。同書には

中國にては太原といひ、夷狄にては大鹵といふ（昭公元年）。

狄人は賁泉を失臺といふ（同五年）。

齊にては綦と謂ひ、楚にては颯と謂ひ、衛にて輒と謂ふ（同二十年）などの文猶多し。

その後兩漢の混一ありて長く同文同軌の化を見たれども、禹域は廣し何ぞ地方によりて語言の同じからざるを怪しむべき。前漢の末に出でたる楊雄の方言十三卷は全く各地に異なる言語を會通するの專書なり。況や五胡十六國の夏を猾りし後をや。故に隋の陸法言は切韻に序して

吳楚は時に輕淺に傷れ、燕趙は多く重濁に傷れ、秦隴にては去声も入となり、梁益にては平聲も去に似たり

と云ひ、顧齊之は慧琳の一切經音義に序して

秦人の去聲は上に似、吳人の上聲は去に似、その間にては輕刺に失し重濁に傷る

と云ひ、景審も亦

古來の音反、吳音と秦音と辨するなく清韻と濁韻と明め難き、武と綿とは双聲となり企と智とは疊韻となるに至る

と云ひ、又陸德明の經典釋文には

方言の差別は固より自ら明かならずして河北と江南とを鉅異とす、或は浮清に失し或は沈濁に滞る

と述べたる如き、殆ど聲韻を談するものゝ常套語となれる觀あり。此等の言の實例とすべきものに北齊の顏之推の家訓の一條あり、其の風操篇に

蒼頡篇に侑の字(王念孫の改むる所に從ふ)あり、訓詁(書名に)いふ、痛みて呼ぶなり、音羽罪の翻と、今も北人痛き時は之を呼ぶ。聲類にては、音于末の翻にて今も南人痛ければ之を呼ぶ。この二音その郷俗に隨ひて並せて行ふべきなり。

と有る罪は上聲、末は去聲なれば江南の去聲は江北にては上聲となるをいふに非ずや、知るべし此の時の楊子雲有らんか其の成すべき別國方言は續篇續々篇に及ぶべきを。

颺 郭璞の音にては霜智の切、北土(應音此土)に作る、琳音引く所に從ふ、この音を行ふ。又所隘切、江南にては此の音を行ふ、應音一五の九

頤 韻英に云ふ、頤は頤なり」と。正しくは各に从ひて頤に作るを、經に客に从ふは俗字のみ。江東の人は頤を呼びて訝となす。幽州人は頤を謂ひて鄂となす、皆聲の訛轉なり、琳音六〇ノ一四

梭 素禾反、關の東西にては皆この音を行ふ。又龜禾反、梁益の間にてはこの音を行ふ、隨兩錄二十五ノ十一

の類この三書にて二十八條ありて、地方を表す語としては

中國 關中 關西 陝以西

江南

山東 江東

北燕 幽州 北人

の十ありて略四方を包括すれども、中國、江南と對言するもの廿五分の十四に上るを見れば南北語言の差特に大なりしを知らるゝなり

釋天產の聲音對には唐の范攄が雲溪友議に載する陸暢の催粧の詩を以て吳音の證とし、磨光韻鏡餘論亦全く之を用ひたり。蓋し攄は僖宗の時の人(四庫全書總目の説による)なれば琳音の成れる建中よりも百年の後に生榮せるなり。則ち吳音の徵はこゝに引けるを用ふべし。俱に内典なるに産雄兩公の目に觸れざりしは當時書籍の獲易からざりしにこそ。

此の如く四方の語音同じからざる中に成れる小學の書が各々其の地方の影響を蒙るは必然の事なれば、玉篇の音を採りて同時に出でたる他の聲韻の書と比較するも亦無益ならざるべし。而して同時に出でたる者としては經典釋文と切韻とを用ひんとす。釋文は十駕齋養新錄に

この書録する所の注解傳述の人多くは是南士。沈重は晩に周に仕ふといへども其の書久しく江左に行はる。この外には北方の學者は絶えて齒及せず

と云ひ、切韻は其の著者陸法言は魏郡の人なれども、大般若婆羅密多經音義に

浮は附無反、玉篇の音は扶尤反(按するに今の宋本も同じ)陸法言の音は薄謀反(按するに王氏刊本も同じ)下の二は皆吳楚の音なり、今並に收めず

とありて亦南方の音の存すること明かなればなり。さて今玉篇の言部に出で、又易書詩爾雅の釋文にも存する者を摘出するに凡そ五十五字ありて、又切韻に在るはその中の三十五字なり、其等の音切を通覽するに

玉篇	釋文	切韻
詆	竹悲	悲=睡
警	居影	九影
謚	莫橘	民必橘=必+畢
譽	與舒	餘魚舒=魚
謠	與昭	餘昭昭=招
訖	居迄	居乞迄=乞+乙
諺	宜箭	魚變箭=變
訝	魚嫁	吾駕(唐)嫁=駕
讎	視周	市流市=流
諛	與珠	羊朱珠=朱
詔	丑冉	勅檢冉=檢

玉篇	釋文	切韻
警	五勞	五勞
詒	與之	與之
誑	俱放	居況(唐)放=況+往
譖	荏賃	疾蔭(唐)賃=鴟=蔭
訕	所姦	所姦
誣	武虞	武夫
謗	補浪	甫曠(唐)浪=曠
詛	祖據	莊助(唐)據=助
誕	達坦	徒旱坦=旦=旱
謔	虛虐	虛約
訐	胡東	胡籠東=工=籠

切韻に(唐)と注せるは蔣氏刊本唐韻に取る者

の類にして、その結果として

1 音切の文字は異なれど玉篇釋文切韻三者に見えぬは二者にて同音となるもの四十八字

2 玉篇切韻同音たれど釋文のみ異なるもの五字

3 釋文切韻同音たれど玉篇のみ異なるもの一字

4 玉篇と釋文と相異なるもの一字、

を得て五十五字中四十八字までも同音なる者存するはいかに本書が忠實に當時の標準音を

出せるかを知るに足りて本書の價值を高むるものとす。

又分韻は當時なほ一定するに至らざりしか。本書と釋文切韻と俱に一致せるは五十五字中四十九字にして、他の六字は然らず。而も其の六字を見るに

玉篇	切韻	釋文	玉篇	切韻	釋文
謚	莫橋 民必	彌畢	諛	許爰 況袁	況遠
訖	居迄 居乞	居乙	訕	所姦 所姦	所諫
訟	似縱 才容	才用	譙	似醺 昨焦	在消

にして切韻と相合ふ五字に上るを見れば亦本書の正確なるを知るなり。譙の似醺反たる、醺は酉に从はずして面に从はゞ焦消と同韻となるべく、玉篇の酉に从ふ者筆誤ならば此の一字も異韻といふべきに非ず。

又詭に居候反の音あり、釋文呼豆反、唐韻呼候反なれば玉篇が牙音とせるもの他の二書にては喉音となされたるなり(玉篇にも胡遘反なきに非ず、その時は喉音たり)。牙音喉音の別は頗る幽微なりけん

廣韻	下革	胡麥	戸八	紘	戸萌	胡角
宋本玉篇	核	爲革	爲麥	爲八	爲萌	爲角

とある下胡戸は匣母に屬し、吾が字音にては加行となりて牙音と近きも傍證とするに足らん。

嘗て陳鱣は聲類拾存に序して

聲類には譬を音して呼宏切とせり。この字說文にては从言熒省声、玉篇にては余瓊切たり。今南人熒火を讀んで寅となすは即ち玉篇の余瓊切、北人の讀むこと兄の如きは即ち声類の呼宏切なり。唐韻但玉篇に依附するを知りて余瓊切と音するのみなるは此その蔽はれし所なり

と云へるが、今の詭の場合は正に之と反對せるも亦玉篇の音の一向ならぬ證か。

4 訓 義

玉篇の字を出すや、第一に其の音、次に古書の用例を出して其の注を引き、野王案あれば之を附し、他の小學書を探り、說文を引きても其の義を取るのみにて形を定むることを看過し(卷十八には異例あり)、終に或爲をいふを通例とす。

謳 於侯反音左氏傳謳者乃出 古經用例 野王案說文謳齊歌也孟子綿駒處於高唐而齊右善謳是也 案語廣雅謳喜也 小學書 埤蒼或爲謳字在口部 或爲一字書爲謳字在心部 或爲二

この體例につきて先感ぜらるゝは後世の字書の其の義を解して古書を以て、之を例證するとは其の順序の反對なることなり。よりに思ふに訓詁の書は爾雅の釋詁釋訓を祖として、解せらるゝものを出して而る後之を解する體裁たり。今や其の解せらるゝもの釋詁釋訓の如く

單字隻語ならずして一句一節の文章となりたれども其の文章を引き併せてその注を出せる（必要に應じては野王案をも）はなほ流風のしのぶべきありて中々に古しとや云はん。

次に各字の訓義を出して康熙字典（この書とかくの沙汰あれども晩出にてもあり、自ら集大成を標榜してもあれば姑く之を引く）と比較せん。

服 山海經に「巴蛇之を服すれば心腹の疾なし」と野王案するに「藥を飲むを服」と曰ふ、禮記に「醫三世ならざれば其の藥を服せず」と是なり。

字典には説文の「服は用なり」をのみ引きて服藥に及ばず。

消 郵驛を傳声と□問上を消息と曰ふ、魏志に「□國に遣して消息を傳へしむ、賊に得らる」と是なり。

字典の解、消息に涉らず（息の條下にも）。そも／＼消息の語は易に出で、剝の象には「君子は消息盈虛を尙ぶ」とあるの疏に「消虛の時に値はゞ身を存して害を避け行を危くして言遜り、盈息の時に値はゞ極言正諫事を立てゝ功を立つ」と云へば消息の二字並列せること盈虛の如し。その轉じて音信の義となれるは普通には梁の元帝の詩の「欲覓行人寄消息、依常潮水冥應還」を引くに、今魏志の出典を得たるも嬉し。

洩 野王案するに少洩は小便をいふ、亦之を前洩と謂ふ。大便は之を大洩と謂ふ、亦之を後洩と謂ふ。史記に云々。

野王のこの案語は國語の「豕牢に少洩して文王を得」の注に「少洩は小便」とのみ有るに慊らずして、史記倉公傳の索隱に「前洩は小便を謂ふ、後洩は大便なり」とあるを合せて出せるものなり。然るに字典の引く所は國語の注のみにて前後洩に及ばず。

結 楚辭に「余が軫を西山に結す」王逸曰はく「結は旋なり」。呂氏春秋に「車は軌を結へす」高誘曰はく「結は交ふなり」。

字典には「曲禮に「德車は旌を結ぶ、注に結ぶは之を收斂するを謂ふなり」を引くのみ。結旌、結軫、結軌は相近き語なり、その一解を載するのみにては却て人を誤らん。

緣 史記に「小吏たらんを求むれども未だ因緣あらざるなり」野王案するに「續漢書に常に之を去らんと欲すれども未だ雅緣あらざるなり」。

字典には「玉篇に「因なり」とのみ引きて其の例を出さず。野王の意は史記の張耳陳餘傳に「張耳雅游」の索隱に「雅游とは游に慣れ故に従ひて多く人に稱譽せらる」とあるによりて「因緣の緣は淺薄なる緣故に止まらずして故きゆかりなるを知らさんとするなり。知るべし」因なり」の解とは天淵の差あるを。

繇 淮南子に曰はく「綿乎として小なる哉、曠乎として大なる哉」と野王案するに「綿は微末の言なり、大戴禮にも「綿々の事なき者は赫々の功なし」と是なり。

字典には微の義は説文の「綿は聯微なり」と「綿々は微細の辭」とを引くのみ。この説文の語を聯

微と讀まば「聯りて微なるもの」にして單に微なるに非ず、又綿聯と讀まば一の疊韻の語にて綿のみの專にする所に非ず、何れにしても野王の周到なるに及ばず。

素 喪服傳に「既に練して反りて素食す」鄭玄曰はく「素は猶故のごとし、平生の時の故食に復するを謂ふなり」云々漢書に「昌邑王喪に居て素食せず、私かに雞豚を買ひて食ふ」と、野王案するに「素食とは菜粗食なり」又曰はく「水旱有るごとに莽輒ち素食すとこれなり」

字典には素餐、玉篇にもあり」と素飽（玉篇になし）とを出すのみにて素食は無し。野王の意は喪服傳のと漢書のとを同語異義とせるなり。

褸 方言に曰はく「褸褸は敗れたるなり、南楚にては凡そ人の貧にして衣被醜弊なるを褸褸といふ」と、故に左傳の「篳路褸褸以て山林を啓く」も殆ど此を謂ふなり

字典には「玉篇に貧にして衣なく醜弊なるなり、小爾雅に布褐にして之を紵するを藍褸といふ、左氏傳云々」とあり、この玉篇とは宋本なるが、衣なくして醜なるは聞ゆれど弊なりとは何がしかるにや。

約 音焉教の反楚辭に「土伯九約」王逸曰はく「約は屈なり」と、野王案するに屈節を謂ふなり、呂氏春秋の旄象の約これなり

王逸の注にはなほ「土伯は后土の侯伯なり、地に土伯ありて門戸を執衛して其の身九屈す」ともあり。呂氏春秋の注には「約は飾なり旄牛の尾、象獸の齒を以て物を飾るなり、一に曰はく約は

美なり、旄象の肉の美とは異味を貴ぶなり」とあれど、約を飾と解するが本味篇の文として妥當ならざるは先人の道破せし所とす。野王は飾といひ美といふ舊解を破りて約を節とし、旄牛象獸の骨節の義として本味篇の上文に述べたる狸々の唇や獼々の炙や雋燕の膠や述蕩の腕やと同類となし、骨節は自ら屈伸する關節となるべければ楚辭の屈とも相通ぜしめんとせるならん。字典には呂氏春秋をも楚辭をも於略切の下に出して、於教切には集韻を引きて屈也と云へるも粗なるに、而も呂氏春秋の注を「約は節なり」と引けるは何に本づけるにや（王引之の字典考證にも之を正す所無きは呂氏春秋にさる本あるにや）。

軫 楚辭に「中結軫して傷を増す」王逸曰はく「紆は回なり、軫は隱なり、心中隱軫して痛むなり」

按するに王注を引いて紆を釋するは上の文と合はず、恐らくは惜誦の「心鬱結して紆軫す」を引くべきなるべし。今本にては其の注「紆は曲なり、軫は隱なり云々心中交々引いて隱痛するなり」とあり「交々引いて」は心鬱結の上句の背膺牀以交痛分より來れるなれば野王は削りて引きたるか。さて字典には「紆軫は隱曲なり」とて惜誦を引き、軫懷は痛念なり」とて哀郢の「國門を出で、軫懷す」を引けるが、軫は隱むなりを出せるもの復に優れるに非ずや。以上は字典と比較して述べたるが、なほ其の他を擧げん

みな紅の扇の日出したるを船のセガイに挿み立て、陸に向ひてぞ招きける

は平家物語扇の的の文章にて與一の妙技もこれよりぞ世には傳へられける。このセガイは「船端に縁の如く板を亘したる所」にして其の漢字を柁とす、倭名鈔に

柁 野王案するに柁は大船の傍の板なり

とありて其の箋注に「神代記にいふ船柁こゝに浮那能倍といふ」とあるは船邊を謂へるにて舳を訓みて柁とするとは同じからず。袖中抄に舟の兩邊に板棚ありて屋の縁の如きをいふ、舟人之を踏みて水を撥く、俗に之をセカイと謂ふ」と云へるが如し。野王は蓋し楚辭湘君の桂棹兮蘭橈の王注に船旁板也とあるを祖述せるにて相傳の訃とす。然るに宋本玉篇には楫也とのみあるを以て漁父の莞爾而笑鼓柁而去もたゞ楫を撃つことゝなれど、赤壁賦の飲酒樂甚扣舷而歌之と云へる風習より推せば漁父の昔もセガイを撃ちたるに非ざるか。

飲羽の出典としては吳都賦「弦に應じて羽を飲む」の注に

劉曰はく飲羽とは射し所の箭その箭羽を没するを謂ふなり。闕子に曰はく宋の景公弓人の弓を以て虎圈の臺に升起東に向ひて射たれば箭彭城の東に集り、その餘逸勁なほ石梁に飲羽せり

とあるを引くを常とす。この注者劉良は唐の開元中の人なり。然るに本書飲字の注に闕子東面して射れば石梁に飲羽す、野王按するに飲羽とは箭羽を没するを謂ふとあるからは劉良は全く本書を祖述せるのみ。

吾が國にて村落又は町村と用ふるは餘りに普通なれど、村は宋本玉篇には聚坊也、廣韻には墅也、集韻には援也聚也(類篇も同じ)と有るのみにて其の解適切ならず。而も陶淵明の詩に曖々遠人村、文に村中聞有民人、咸來問訊とある用法が我のと同じきは六朝頃の用法の我に存するを思はするに、果して慧琳一切經音義の十三に 集訓云村聚落 十九に廣雅落居也人衆所居曰村 と引けり。この人衆所居は無論廣雅の文ならねば慧琳の自ら解を下しゝか若くは引書の名を佚したるかならん。然るに吾が中算の法華經釋文に玉篇の

村 聚落人所聚居也

を引けるは眞に適解ならずや。

韻 声類に音の和するを韻といふなり

声類は魏の李登の撰なり、漢魏以上に韻の字存したればこそ此の解はあれ。顧炎武が漢魏以上の書を考ふるに並に韻と言へる者なし、此の字の必ず晉宋以下に起りしを知らるゝなり(原注、晉の陸機の文賦に曰はく「百世の闕文を收めて千載の遺韻を采る」と)、文人の韻を言へる始めて此に見ゆ。

と云へるも今は泛きたらん。

挈 莊子に「其の大きな牛を蔽ひて挈百圍」野王案するに挈とは猶之を束約せるがごときなり、束約して其の圍の大小を知るなり、史記に「長を度り大を挈し權を比し力を量る」とこ

れなり

とは陸氏の莊子音義に「挈は約束なり」とあるに比して優劣如何、一の「之」字によりて動詞と見るの意火よりも明かならずや。

食 鴻範八政の一に曰はく食と、孔安國曰はく農業に勤むるなり。

野王案するに此の食は五穀の食ふべくして以て人命を護るをいふなり、論語の「食を足し兵を足す」是なり。

陶 爾雅に曰はく鬱陶とは喜ぶなり、郭璞曰はく孟子に「鬱陶として君を思ふ」と云へる是なり。

野王案するに鬱陶は亦哀思するなり、尙書の「鬱陶たる子が心これなり」(愼吾按するに郝氏の爾雅義疏に「鬱陶はなほ怡悦といふが如し、並に字の双聲、其の義も又俱に喜となるなり、轉じて鬱悠となる方言に「鬱悠は思なり」郭注に「鬱悠は猶鬱陶のごとし」とあり)とある如く鬱陶には喜と哀思との兩義あり、顧氏の哀思を補へるは該備なり。

沈 莊子に「是陸沈なる者なり」司馬彪曰はく「水なくして沈めるなり」。

野王案するに陸沈とはなほ淪溺のごときなり、陸に居れども沈溺せるが若く聞ゆるなき者を言ふなり。史記の「俗に陸沈して世を金馬門に避く」是なり。

纒 漢書に「纒に數月のみ文穎曰はく青の聲」。

野王案するに此も亦音は似來反にしてなほ僅能劣能の如きなり。鄭玄、周官禮記を注して六たび裁の字となし、東觀漢紀及び諸史賈逵注の國語も並に財の字と爲せり。

紼 周禮に「葬に及んでは帥ゐて六紼に屬す」鄭玄曰はく「棺を舉ぐる索なり」と、鄭玄、儀禮を注しては棺を引いて軸輶に在るを紼と云ひ、禮記の「葬を助くるものは必ず紼を執る」にては鄭玄曰はく「車を挽くの索なり」と。

野王案するに凡そ索は皆紼と曰ふべく、柩を舉げ車を引くものに止まらざるなり、毛詩に「汎々なる楊舟は紼纒これを維ぐ」これなり。

の類いづれも舊説以外に一家の見を立てたるもの。又音の條に

禮記に「凡そ音の起るは人心より生ずるなり、心の動くは物之をして然らしむ、物に感じて動くが故に声に形あらはる、声相生ずる故に變ず、變じて方を成す之を音と謂ふ」鄭玄曰はく「宮商角徵羽の雜比せるを音と曰ひ單出するを声と曰ふなり」と、野王案するに直に響に出づるを声と曰ふ、声を以て相韻するを音と曰ふ、故に樂記に曰はく「情中に動いて声に形る、声の文を成すを音と謂ふ」と

とあるは毛詩の序の「情は声に發す、声の文を成すを音と謂ふ」の疏の

此に「声の文を成すを音と謂ふ」と言へば声と音とは別なり、樂記の注に「雜比せるを音と曰ひ、單出せるを声と曰ふ」と又曰はく「声を審にして音を知り、音和して乃ち樂を成す」と、故に

別ちて三名となす

の粉本たらざるか。綬の條に

續漢書に古は玉を佩ぶるに尊卑叙ありき、五霸迭に興りて、戰兵息まず、佩は戰器に非ず、紱は兵旗に非ざれば、是に於て紱佩を解き去りて、其の絲縫を留めて以て章表となす、紱佩既に廢れたれば、秦乃ち采組を以て縫に連結して、章表を光明にし傳へて相結受したるが故に之を綬と謂ふなり

とあり。今の後漢書の八志が司馬彪の續漢書を襲へるは勿論なるが、其の文は

古は君臣玉を佩ぶるに尊卑にて度あり、上_下の字を佚したらん、韍あり貴賤殊(佩の訛か)あり。佩は徳を彰す所以にして服の衷なり、韍は事を執る所以にして禮の共なり故に禮にその度ありて威儀の制は三代之を同じうす、五霸迭に興りて戰兵息まず、佩は戰器に非ず、韍は兵器に非ざれば、是に於て韍佩を解き去りて、其の係璲を留めて以て章表となす、故に詩に曰はく、韜々たる佩璲とは此の謂なり、韍佩既に廢す、秦乃ち采組を以て璲に連結し、章表を光明にし轉た相結受す故に之を綬と謂ふ

とあり。野王略して之を引きたるか、後漢書に文飾して之を採りたるか、之を並看するも亦博聞の資たらん。

以上述ぶる所は今日現存せる一部分若くは他書の引文に見る所のみ、而も原本玉篇の解釋

が該備にして且つ斬新なること後世の字書の及ぶべきに非ざるは明かなり。儻し本書にして完存したらんか後世の小學の徒を益したること果して幾何ぞ。故に吾人は本書の混びたるは幾多の知識を埋没せしめたるものにて後人が再び之を發見する迄には文化上多大の損失と徒勞とを餘儀なくせしめられたるを斷言して憚らざるなり。

終に臨みて小學上聚訟せられたる問題が本書によりていかに光明を與へらるゝかを見ん。嵩崧の二字は俱に説文になくして嵩はその新附字たり、且つ嵩字は既に七たびまで漢碑に見ゆるを以て嵩を崧よりも古しと考へて爾雅釋山に「山の大にして高きは崧」とある崧をも嵩に改めんとし、郭注に「今中嶽の嵩高山も蓋し此の名に依る」と云へるを證として郭氏の見たる爾雅には嵩と有りたればこそ中嶽云々を持ち出せるなれと主張し、釋文や唐の石經に崧と有るは後人の改めし所とする説、孫詒讓の籀廋述林の爾雅匡名補義あり。今本書を見るに崧字の下に郭注を引きて崧高山に作れり、さては郭注を證として爾雅の本文を改めんとする論據は先づ動搖を來せりといふべく、又本書が崧を前に嵩を後に出して嵩には「字書に亦崧の字なり」と注せるも崧を主とせる云ひ方なれば爾雅は中々に崧とありしを知るべし。蓋し古は崇字にて崧嵩の義を兼ねたりけん、後山高の專字として崧嵩高山の專字として嵩が出でたれども同本の字なれば互に適用せられて詩の崧高維嶽を禮記には嵩高と引き、爾雅の山大而高崧を釋名には山大而高曰崧と引きたる程なり、さはあれど山高は崧たるべきにて今の爾雅の崧に

作るは中々に正しきものたるなり。

説文に由を正文とせざるに、由に从ひて声を得るものは重文を合すれば三十一字なり、こゝに於て由は説文の何字なりやの諸説紛々たり。本書由を用部に隸したるに據りて孫詒讓は「由を釋して玉篇の義を申ぶの一篇を作れり、曰はく

由は即ち用の異文にして古別、由字有るに非ざるなり、用の文たるトに从ひ中に从ふ、其の上の横畫を増して左に屬かしめ、微しく其の下縦畫を殺ぎて外に出でざらしめば由の字を成さん。古音にて用は東鍾江部に入り由は尤幽部に入れども声は相轉すること文に於て周は口用に从ひ用亦声なるが由と同部なるを見よ。經傳中に用由の二字互に訓するは僕を更ふとも數へ難からん、禮運に「故に兵是を用て作りて謀是に由りて起る」とありて「是を用て作る」と「是に由りて起る」と語同じ、これ由用の義同じきの證、竊に謂ふ古より古籀遞變して一字分れて數形となりて孳生の字又各々之に従つて形声をなす、由用の變も蓋し亦なほ此のごとし、展轉傳習して遂に或は一字たるに味く是に於て音讀を併せて之を變じぬ云々説文の舊本には常にその説ありしに移寫失脱せしなるべし、顧希馮、由字を以て用部に隸するを知れども復た用由同字異形の本を辨ぜず

矜の字は、今本説文に从矛今声とあるに依るものなるが、漢の漂水校官碑の矜孤頤老、魏の受禪碑の哀矜庶獄また漢石經の拓本には皆令に従へり。又この字、詩にて韻となれるを見るに

菀柳にては天臻と、何草不黃にては元民と、桑柔にては旬民填天と押せば舌内音(尾韻がn)たる明けし。然るに今字は唇内音(尾韻m)なれば从今にてはn音たるを得ず。若从令ならば、令は東方未明にては顛と、盧令にては仁と、車鄰にては鄰と、十月之交にては電と韻すれば、矜の天臻元民句と押するも當然なり。然らば矜は令に从ひて巨巾反(舌内音)たるが正に、今に从ひて居陵切(喉内音)たるが轉なるや明けし。華嚴經卷廿一の音義に「玉篇矛令無矛今者也」とあるは此の疑を釋くの一光明なり。

訊は問也とは詩正月の毛傳や説文に、諄は告也とは爾雅に見えて兩字は形声俱に別なり。然るに陸氏の釋文に陳風の訊字を本又諄に作る、音信、徐は息醉反、告ぐるなり」と云ひて同字の如くに扱ひたるを以て、養新錄には

六朝人は多く艸書に習ひたれば卒を卒に爲り遂に𠂔と相似たれば陸元朗も辨正する能はずして一字を兩讀しぬ云々王逸の楚詞を注するや諄予不顧と引きたるは其諄に作るべきをいふの明證、徐の息醉反と音せるは是徐本も亦卒に从へるなり、陸氏が韻緩不改字の説に狃れて諄を讀みて信とせるは豈其然らんや

とて陸氏を諄訊を辨ぜずと罵れり。本書は言部の首を缺くを以て訊を收めねども諄字は存して

周禮に「情を用ひて之に諄」鄭玄曰はく諄は告なり。

今本秋官少司寇に「之に訊ぐ」とありて、注に「訊は告なり。爾雅にも亦云ふ郭璞曰はく「相問訊するなり」」。

今本釋言に「訊は言なり」郭注に「相問訊す」。按するに亦云ふとあるからには爾雅の文は鄭玄のと同じかるべき理なれば「諄は告なり」も「言なり」の訛ならんか。

毛詩に「歌ひて以て之に諄ぐ」傳に「諄なり」。

今本陳風墓門に「之に訊ぐ」傳に「訊は告なり」とあり。

韓詩に「諄は諫むるなり」。

墓門の釋文に「韓詩に「訊は諫むるなり」とあり」。

禮記に「其の諄疾を多くす」鄭玄曰はく「諄は問なり」云々。

今本學記に「其の訊を多くす」言數に及ぶ注に「訊は猶問の如きなり」。本書の疾は言の誤ならんが、句讀今本と異なり。

とある如く今本に「訊」に作る者を殆ど「諄」に作れり、則ち「諄」訊相通用して兩声兩義を兩字の何れにも系くるを得たりといふべく、經義述聞に

「訊古亦讀むこと諄の若くなりき故に二字互に通じて諸書に義諄告たるものにして「訊」を通用し、或は義訊問たるものにして「諄」を通用す、たゞ其同声これを以て假借せるのみ、又盡く之を譌字と謂ふべけんや」

5 説文との比較 附方言郭注の校正

玉篇が説文と深き關係あるは部首の數の同じき順序は然らず、文字を出す順序が略之に據れるにても明かなり。然るに今日行はるゝ説文は宋の雍熙三年に徐鉉等が勅を奉じて校定せる本にして、この本たるや

集書の正副本及び羣臣家藏の者を以て備に詳考を加ふ

と稱する者なれども、汗簡に引ける舊説文や宋の戴侗の六書故に引ける唐本やに比すれば善を擇びて從へりとも云ひ難く、特に莫氏の傳へたる木部舊文、わが國に存する説文切に比すれば頗るその面目を異にするものたり。今本説文の信用かくの如しとせば、六朝に行はれたる説文を引用せる玉篇を以て之と相比證するは極めて有益なるべきを以て逐字對校せんとす。（全同と也の字の有無とは出さず。上は今本説文、下は玉篇誤寫と知らるゝは改めて出す）

清の楊守敬に重訂説文古本考の著ありて其の序は晦明軒稿に見えて

今玉篇以下の書を以て説文の字句を定め又玉篇原本を以て説文の次第を定む

とあれば、玉篇のみに據るとは異なれど、其の用意は吾が爲さんとする者と同じ。王重民の楊惺吾先生著述攷(文字同盟第十號に載す)に重訂說文古本考四卷とあれば北平の故宮博物館圖書館に現存するに似たり。今之を引用するを得ざるを憾む。

譏 嘉善也 喜善也

按するに集韻類篇にも喜に作れり。

詡 大言也 人語也

按するに羽聲、往々大なる意となれば大言や當らん。

詞 共也 共同也

讀 中止也 司馬法曰師多則人讀々止也

中正也 司馬法曰師多則民讀之讀之止是也

按するに中正は中止の誤なること論なきに似たれど、篆隸萬象名義には正と中止と別々に出せるを見れば、或は司馬法以下にて止の解となるならん。

謝 辭去也 辭也 謂相辭謝也

按するに文選七發の謹謝客、別賦の謝主人、今依然の李注にも辭也に作る。

謠 徒歌 獨歌也

按するに玄應音義に二所まで說文獨歌也を引き、藝文類聚にも獨歌謂之謠とあり

訥 頓也 鈍也

按するに段注にも頓之言鈍也とあれば直に鈍也とあるや簡捷。

訥 言難也 難也

按するに言部なれば言難とあるや優。

諛 諛諛也 諛也

按するに廣雅にも諛諛也とあり、段氏は云ふ「許書に諛あれども諛なし故に諛の字に仍る」と、桂氏は云ふ「說文に諛の字を脱せれば寫す者改めて諛と爲す」と、而も顧氏見る所は言に従へり。

讎 猶讎也 猶應也

按するに桂氏既に讐は當に應に爲るべし、本書に「應は當なり」漢書灌夫の傳の注に「讐は當なり」史記封禪書の索隱に相應するを讐と爲す云々の說あり。

聲 一曰哭不止悲聲聲々 一曰哭不悲也

按するに本書止の字を脱せり。

詖 慙語也 慙語也

按するに段氏云ふ「疑ふらくは左傳定八年に『桓子咎しほく林楚に謂ふ』の咎ならん、杜も『咎は暫なり』と云へば當に咎字に作るべし」と。篆隸萬象名義にも慙語とあり。

詒 一曰遺也 一曰相喜也

按ずるに遺の一解は少くべからず、恐らくは遺の是を脱して遂に喜に訛れる者。

諧 言諧謔也 諧謔也

謔 駭也 哈也

按ずるに桂氏にも駭也は當に談たるべしの説あり。哈も唉の筆誤ならん。韋孟の詩の勸唉厥生を漢書に談に作りて唉談は同字。

誣 加也 加言也

譌 訓也

訓 說文亦譌字也

譌 譌也

按ずるに今本說文は別字とせるに玉篇は同字とせり。篆隸萬象名義を検すれば譌竹尤反譌之救反と出しながら、訓に譌字とも註せり。

詎 詎也 祝也

按ずるに說文詎詎也ともあれば此の詎は今の呪字との説あり。さては祝も中々に近し。

諺 離別也 分離也

諛 諛可惡之辭也一曰諛然 諛諛可忌之辭一曰然也

按ずるに項羽紀索隱に唉歎恨發聲之詞とあれば可惡の方便らん。

諱 痛也 哀痛也

諛 膽氣滿聲在人上 膽滿氣也

訾 不思稱意也 思稱意也

按ずるに玄應音義にも訾は量なり說文に思意に稱ふを訾といふ、訾は思なりとあり。

詛 多言也 詛多言也

詢 一曰祝也 一曰祝也

按ずるに廣韻にも祝也とあり、本書は筆誤。

訕 訕訕多語也 訕訕多言也

譌 語相反譌也 譌謔也

按ずるに段氏は「譌謔は語相及ぶなり」と改め、桂氏も「當に語相及ぶは譌謔なりに爲るべし」と云へり。本書、語相及を佚したれど譌謔と出せるは妙。

讟 言壯貌一曰數相怒也 言疾兒也一曰相數讟也

按ずるに周雲青の說文解字詁林跋にも「廣韻二十一麥に『讟は疾言』と、これ壯は乃ち形近の筆誤」と云へり。

讻 匹也 比也野王案毛詩國歩斯讻是也今爲頻字

按するに同跋に「頻は響の同音省借に係る、詩の桑柔の國歩斯頻の鄭義に『頻は猶比のごとし』廣雅釋詁と釋訓とに『頻は比なり』と、其の意玉篇に引ける説文と合ふ、是匹は乃ち形近の筆誤」と云へり。

諛 便巧言也 巧言也

詛 扣也如求婦先詛發之 扣也如求婦先詛發之

按するに論語の我叩其兩端の注に我則發事之始終とあり、公羊傳の注にも口猶叩段氏の説に従ふ語發動也とあり。詛と叩と相近ければ發の字や優らん。

說 言相說司也 言相說同也

按するに廣韻には伺也とあり、司も同も俱に伺の訛か。

諧 加也 恒言也

按するに廣韻には加言也とあり。

誕 詞誕也 調誕也

按するに桂氏は「當に調也に作るべし、説文に『調は讞なり』と。既に譌りて詞となりたれば又誕の字を加へたるなり」と云へり。説文に讞は誕なりとも有りて調讞誕の三字義相近ければ調誕の語も有りたるならん。本書の調は誤。

這 籀文誕省正 (這)籀又誕字

按するに繫傳校錄には「大徐の別本には省正の二字なし」と云ひ、王氏は延字は延にノの添はれるなれば正にては不成字なりと云へり。今本説文非なり。

謔 戲也 卽戲也

諛 很戾也 卽諛也

按するに諛の字あるべき理なし

訛 大呼也 忌言也

按するに篆隸万象名義にも妄言也とあれば(忌は妄の筆誤として)本書にはもとより此く有りたりとすとも、妄言の解は訛にふさはしからず。楚辭の注に叫急呼也とあれば或は忌言、妄言ともに急言の誤ならん。

諤 妄言也 諤 諤或从琴 諤亦諤字也

按するに説文にては謹諤諤の順序なるに玉篇にては謹は六字前にありてこゝは諤諤とつゞけて諤の注に説文亦諤字也とあり。同字を亦諤字と注するの誤なるは明かなるが、此の諤を方言に然也、廣雅に應也とありといふより推して亦□字といふは當に諤に作るべきを知る(古逸本には諤と改めて引けり)を以て説文は諤を以て諤の或躰とし(諤は別字)玉篇は諤を以て直に諤の異躰とせるの相違ありとす。沈乾一の寫説文解字詁林記に諤の注に説文の亦諤字也を引く、廣韻九麻を攷ふるに諤の下に諤同上とあ

れば誇は譁の重文たるを證するに足り、今の説文は傳寫に誤りて下文謬の重文とせしなり」と云へるは無造作に玉篇を信受したるなるが私見は之と異なり。誇謬の二字はともに譁の或舛たりしを以て説文にも連ねて之を出したるが、後人謬には羽俱切を附して譁とは別字となしたれば玉篇は之に従ひて復謬を出さざりしのみと信ぜんとす。華零の相近きは木に从ふの字にも有りて、説文には樛は木なり其の皮を以て松脂を裹む、木に従ふ零の聲讀むこと華の若しと有るに、宋本玉篇はその旁を華に改めて「樛は木皮、以て燭となすべし、胡化の切」と云ひ、毛詩釋文には樛は惡木なり勅書の反」と別字とせる關係正しく此の譁謬誇のに似たらすや。

暑 大呼自勉也

大呼也自冤也

按するに段桂二氏も冤字として解せり。

謬 狂者之妄言也

狂者之志言也

按するに志は筆誤。

訐 詭譎也

詭僞也

按するに尙書の南譎を周禮注、王莽傳ともに南僞に作れ、ば僞も猶譎なり。

嗇 咨也

嗟也

按するに嗇と嗟とは通用字なれば本書に筆誤あらん。段桂兩氏は咨を嗟に改めたり。

讐 失氣言也一曰不止也

失氣也一曰言不止也

按するに桂氏の「言」の字當に一曰の下に在るべきを寫者之を亂しぬ、一切經音義十に引きて失氣也一曰言不止也とあり」と云ふと吻合せり。段氏が「此は言に从ふが故に之を釋して失氣言と曰ふなり」と云へるは中々に迂。

譴 相毀也一曰畏亞

相毀也亦云畏譴也

按するに桂氏も「亞當に譴に作るべし」と云へり。

訐 面相斥罪相告訴也

面相斥罪相榮訴

按するに韻會には下の相字なければ段氏それを用ひたれど、本書にも兩相字あり。榮訴の義通じがたきが禮記内則の疏に齊人謂相絞訐爲棹啓とあると由あるにや。

譴 謫問也

問也

按するに謫の字は無かるべからざるもの。

諛 讓也國語曰諛申胥 讓國語曰吳王諛申胥是也

按するに諛と諛との相混すること上に云へるが今本吳語の文は吳王還自伐齊乃諛申胥曰云々とあり。

諛 責望也 相責諛也

按するに桂氏も諛を用ふ。

諛 尉也 慰

按ずるに廣韻にも慰也とあり。

訶 知處告言之 知處告也

按ずるに急就篇顏注にも訶謂知處密告之也

詭 責也 青

按ずるに本書の筆誤。

誰 何也 訶也

按ずるに何の本義は儋何今の擔荷の意訶のは大言而怒也なれば誰何(今用ひる)には訶もふさはし。

諱 飾也一曰更也讀若戒 飭也一曰戒也

按ずるに革戒の二字古通用したれど、本書に聲類の諱謹也をも引けば戒也の解あるも宜なり。

譏 詆譌也 謾譌也

按ずるに段桂二氏俱に抵譌に改めて漢書梁孝王傳の抵譌置辭を引けり。されど説文に又譏謾連邊とも有れば謾譌も可ならん。

譏 禱也累功德以求福 相祝累功德以求祿

按ずるに譏は周禮大祝の六辭の一なれば祝の字も由あり。

諱 諛也 忌也

按ずるに段氏も忌に改めたり。又この字、説文大徐本には誠諛字の次に序でて小徐本は本書と同じ、以て大徐本は淺人の妄移たるを知るべし。

謾 恥也 謾詬恥辱也

按ずるに段氏も謾詬の二字を補へり。

譯 傳譯四夷之言者 傳四夷之言也

按ずるに段氏も李善徐堅によりて譯字を刪れり。

詰 競言也 競言之也

沓 語多沓々也 語交沓々也

按ずるに毛詩の箋に噂々沓々相對談話とあれば、交も亦由なり。

曹 獄之兩曹也在廷東从棘治事者从曰 獄之兩曹治事者也

按ずるに本書は説文を摘引せるか。

乃 曳詞之難也 申詞之難也

按ずるに段氏は曳有矯拂之意曳其言而轉之と云へれど、申詞も亦妥。

丐 氣欲舒出丐古文以爲丐字 氣欲舒出也口以爲丐字

按するに古文一に从ふものを小篆は二に作るを通例とするに、今小篆一なるものを古文二に作るを以て古文云々の解あるか、本書の𠂔字に作るも口の字も誤あるべし。

𠂔 亟詞也 極詞也

按するに亟は敏疾なり、極は棟なり、爾雅に𠂔条掣曳也とあるより見れば敏疾も當らざらん。

乎 語之餘也 語之舒也

按するに聲上りて越揚するの形に象るの字なれば舒の字も亦可。

號 呼也 痛聲也

按するに說文号を解して痛聲也といふ。本書誤りて引けるか。

𠂔 審慎之詞周書曰𠂔三日丁亥 亦審慎之詞也周書𠂔三月丁亥

按するに今の召誥の文は三日丁巳なれば逸書ならんかの説あり。果して然らば三月も無下に非とすべからず。

章 樂竟爲一章 樂歌竟爲一章也

按するに段氏も歌所止曰章と注せり。

竟 樂曲盡爲竟 樂曲竟也

按するに竟の解としては盡や可ならん。

𠂔 急告之甚也 急也告之甚也

按するに玄應音義また急也とあり。

嚴 敎命急也 敎令急也

按するに六書故に引く所も敎令なり。

𠂔 譁訟也 譁訟也

按するに篆隸萬象名義にも譁訟とあれば譁は筆誤。

𠂔 多言也讀與𠂔問 𠂔也又若言也

按するに篆隸萬象名義にも𠂔多言とあれば本書や優らん(若は多の筆誤)。而して今本説文が音とせるを本書に直に義とせるは譁の時と同例。

𠂔 鳥羣鳴也 鳥羣明也

按するに明は筆誤。

𠂔 管樂也 管有七孔也

按するに鄭司農の周禮注にも簫七空とあり。

嗣 諸侯嗣國也 諸侯子曰嗣國也

按するに諸侯の子を特に嗣國といふ語ありしにや。

扁 署也戶冊者署門戶之文也 署也扁門戶之文也

按ずるに説文の方通じ易し。

器 皿也象器之口犬所以守之

器四曰器

按ずるに四は皿の誤。

只 語已詞也 語之詞也

按ずるに王氏も「樂只君子の如きは韻の絶るゝ者に非ず」と疑へる所。本書の解極めて當れり。

訥 言之訥也 言之内也

按ずるに篆隸萬象名義にも訥とあれば本書のは筆誤。

喬 一曰滿有所出也 一曰滿也

按ずるに王氏も「廣韻に説文の一曰滿也を引けり、蓋しこの文本、一曰滿也出也と作りけん、有所の二字は上の有所穿に縁りて衍せり」と云へるもの。この字の音、本書には有出反とあり、有所出の三字この音切に關係なきか。出也の解も當らじ。

繖 欠兒 不皇也字書一曰不解理也

按ずるに篆隸萬象名義に一曰不解理、宋本に欠兒一曰不解理とあれば不皇蓋し欠兒の筆誤なり。

歛 吹也一曰笑意 欠也一曰笑意也

按ずるに欠は吹の缺けたるもの。

𪔐 喜也 𪔐々書也

按ずるに沈乾一の寫説文解字詁林記に「今の説文は一の𪔐字を奪ふ、蓋し亦二徐篆注連讀の例を明らめずして妄に刪れる所」と。書は當に喜に作るべし。

𪔐 歛歛也 𪔐也

按ずるに聲類には鳴とあり、鳴は筆誤。

𪔐 幸也一曰口不便言 𪔐辛也一曰口不便也

按ずるに篆隸萬象名義にも幸とあれば𪔐辛は誤。

欣 笑喜也 茂皇也

按ずるに茂は笑の、皇は貌の畧體の筆誤(前の字にも戲笑皇と誤れり)。

𪔐 笑不壞顔也 笑不壞頓也

按ずるに本書に筆誤あり。

𪔐 怒貌也 愁貌也

按ずるに説文心部に怒一曰憂也とあれば意は相近し、名義には愁貌也とあること本書と同じ。

𪔐 有所吹起 有所歛起也

按ずるに文選の頰白馬賦の注に引ける説文も同文なれば本書は誤。

𦣻 含笑也 含笑也

按ずるに合は筆誤。

𦣻 人相笑相𦣻瘰 相笑相𦣻輸也野王案東觀漢記市中人舉手𦣻揄王霸爲雅字也

按ずるに玉篇の輸は揄の筆誤徐諧の韻譜にも揄とあり。又雅は名義に邪に作るに従ふべし。この𦣻揄は今の邪揄なり後漢書之王霸傳には市人皆大笑舉手邪揄之とありてその注に説文云く此云邪揄輕重不同とあれば野王も爲邪字と注せるなり。

𦣻 𦣻々氣出兒 𦣻々氣出兒也

按ずるに𦣻𦣻同音なれば玉篇のも猶𦣻々の意。

𦣻 吟也臣鉉等曰口部此籀文嘯字此重出 籀文嘯字也嘯叔足口出聲也

按ずるに説文口部に嘯吹聲也 𦣻籀文从欠とあれば説文こゝに吟也と有るは可ならず。玉篇のを優とすれど其の叔足は𦣻𦣻と同字の誤分せるもの。

𦣻 卒喜也从欠从喜 (𦣻)平喜也

按ずるに平喜の語通ぜず必ず筆誤ならん。さて此の篆大徐は壹に小徐は喜に从つて作るを以て段氏は小徐に(説解と合ふ)桂王氏は大徐に据れり。蓋し大徐に据るは𦣻の形は喜の古文として別に説文に出でたればなり。されど名義にも本書と同じく喜に

从へり。

𦣻 𦣻也 知𦣻也

按ずるに𦣻の誤なるべきこと段桂王の齊しく唱ふる所。本書の知は𦣻の誤。

𦣻 欲𦣻也 須飲也

按ずるに小徐は欲飲に作る。欲よりも須や切ならん。

𦣻 盡酒也 蓋酒也

𦣻 監持意口閉也 賢持意口闢也

按ずるにともに本書は誤古逸本は改めて出せり。

𦣻 指而笑也 指而嘆也

按ずるに亦本書の誤。

𦣻 昆干不可知也 昆與不可知也

按ずるに昆干か昆于かの論あるが本書に與に作るは子を助くるに足れり。

𦣻 咽中息不利也 咽中氣息不利也

按ずるに一切經音義に引けるにも氣息とあり。

𦣻 𦣻也 欲揖也

按ずるに本書の誤。

歉 歉食不滿 食不飽也

按するに一切經音義にも不飽とあり。

𪔐 𪔐𪔐無慙、一無漸也(以下筆誤としるき者は、を用ひて別に文字を出さず)

按するに本書の誤。

𪔐 飢虛也 飢也虛也

按するに王氏にも飢にて句絶するの說あり。

𪔐 相與語睡而不受也 相物與語睡而不受也

按するに本書の物の字通じ難し。因にいふ萬象名義には語を訴とあり、睡而不受には與訴もふさはし。

𪔐 飯氣蒸也 飯氣業也

按するに本書は筆誤。

飴 米蘖煎也 米

按するに本書行の改まるまゝ、に誤りて遺したりと見ゆ。

𪔐 熬稻粳程也 熬稻張、也

按するに本書の、は誤にて、張饒は太平御覽に引けるところ。

錫 飴和𪔐者也徐盈切 (錫)飴𪔐和也

按するに易に从ふべきは段氏等の主張する所。

𪔐 周謂之𪔐宋謂之𪔐 周謂之𪔐衛謂之𪔐

按するに本書𪔐字を佚す(古逸本は補ふ)。さて檀弓釋文及び初學記には說文宋衛謂之𪔐の文ありて之と同じからねど國名を兩書各一半を佚したるも妙。

𪔐 以羹澆飯也 以羹澆飯也

養 供養也 足食

𪔐 晝食也 晝食也

殮 𪔐也、也

𪔐 日加申時食也 日加申時

𪔐 𪔐也 𪔐也

𪔐 吳人謂祭曰𪔐 吳人謂祭曰𪔐

飽 𪔐也、也

按するに何れも本書の誤

𪔐 食臭也 食而臭之也

按するに段注に食臭謂臭而食之也とあるは本書と合ふ。

館 客舍也周禮五十里有市、有館、有積以待朝聘之客

客舍也周禮五禮五十里有市、有候館候館有積以待朝聘之客

按するに周禮今本遺人職にも候館とあり、説文のは誤奪。

𩚑 飯傷熱也 飯傷熱也

按するに句讀に古人一炊而數日食之如今瀋陽土風と云へば傷熱も由あり。

𩚒 飯餲也 飯傷濕也

按するに説文餲の前に𩚑飯傷濕也とあれば、本書の如くならば餲の解は飯餲とあるべきなり。知らず本書誤りて餲の下に𩚑の解を系けしや否やを𩚑の下には説文を引かす。

𩚓 祭酌也 祭酌也

按するに説文に酌𩚓祭也とあれば本書は誤なるべきが、史記孝武本紀索隱には祭酌也と引けるも本書に近し。

𩚔 馬食穀多氣流四下也 馬多穀多氣流逃下也

按するに段注には汗液前後左右四面流下とあれど、氣には逃下もふさはし。

𩚕 糧也从人食 糧也字从人仰食也

按するに一切經音義二に引けるも本書と同じ。

𩚖 陳留謂健爲餽鬲部にあり 陳留人謂餲爲餽也

按するに周易馬注に餽健也と有るは説文と合ふ。又鄭注に糝謂之餽と有る其の糝は説文に糜也、又その糜は同に餲也と有るは本書と合ふ。

餌 粉餅也(同上) 餅也

按するに後漢書樊曄傳の注に引ける説文は本書のと合ふ。

健 𩚗或从建聲(彌部) 亦𩚗也𩚗也

按するに本書の上の字を𩚗の誤とすれば説文と合ふ。こゝに怪しむべきは萬象名義亦健に𩚗字と注して本書と誤を同じくすることなり。

𩚘 𩚗或从食衍声 亦、字也

按するに本書の筆誤。

次 慕欲口液也 慕也欲也口依也

按するに本書の口依は口液の誤。錢氏、説文につきて慕欲爲一義、口液爲一義と云へるは玉篇に近し、萬象名義も三解とす。

幸 尼輒切 所以驚人也讀若瓠一曰俗語以盜不止爲幸

俗以盜不^〇也一曰所犯驚人也讀若、

按するに本書所犯に作るは五經文字の所以犯驚人也に近し、讀若の下の子と溢とは本書の筆誤ならん。

丌 下基也薦物之丌象形 下基也薦物之几象形也

按するに説文に几踞几也とあり、薦物之踞几といふや優らん。

亅 古之道人以木鐸記詩言从辵从丌々亦声

古之道人以木鐸記詩言故从辵从丌声也

按するに道、時ともに本書の誤。

畀 相付與之約在閣上也 相付與之約在閭上

按するに本書の誤。

奠 下其丌也 丌其九也

按するに箕字の解にも下其丌也とあれば説文のにても通すれど、其の下舛の丌なるは説明を要すまじく、本書の九を几の誤として「丌は其の几」といふも可ならずや、几の本義は踞几なれど今は薦くものに流用して。

左 手相左助也 手相佐也

按するに小徐には手左相佐也とあり、此の左を衍文とすれば玉篇と合ふ。

差 貳也差不相值也 貳也不殖也

按するに差不の差の衍なるは義證にも九經字樣集韻によつて之を云へり。本書の殖は筆誤。

𠂔 ト以問疑也 ト以疑問也

爻 交也象易六爻頭交也 交也象易六爻交頭

按するに俱に本書のは誤。

爾 麗爾猶靡麗也从冂从𠂔其孔𠂔 麗爾猶靡麗也从冂𠂔其孔麗々也

按するに韻會にも其孔𠂔々とあり。

軌 車軌前也 式前也

輅 車輪前橫木也 車輪前橫林也

按するに林は筆誤。

較 車騎上上曲銅也 車倚上曲銅也

按するに騎倚ともに軌の誤。

輶 車橫輪也 橫笮也

按するに輪は説文に「車輶間の橫木」と見え、笮は釋名に「横に竹を織りて之を作る孔笮々なり」と見え、たれば、本書も誤にはあらず。

輶 車籍交錯也 車籍交革也

按するに文選七發の注に引ける説文も革に作れり。

輶 輶車前橫木也 輶車從橫也

按ずるに文選南都賦の注に「輶は相連るの貌とあれば縦横も由あり。

輶 礙車也 擬車也

按ずるに詩小旻の疏には礙車木也と引き、宋本玉篇にも礙車輪木とあれば木の字あるべく云はれたり。今ともに木の字なきは誤脱なりや否や。

輩 若軍發車百兩爲一輩 軍發車百乘爲一輩

按ずるに若の字着落なし、衍ならん。

軌 車徹也 車轍也

按ずるに轍は新附字なり。

輶 車輶鉦也讀若堅 車輶鉦聲一曰堅也

按ずるに輶鉦聲は小徐と、堅也是一切經音義と合ふ。

輶 抵也 低也

按ずるに本書は小徐の韻譜と合ふ。

輶 車小缺復合者 車小缺合也

按ずるに本書に脱誤あり。

輶 接軸車也 接軸也

按ずるに一切經音義にも車の字無し。

輶 反推車令有所付也 推車有所付也

按ずるに漢書の集注にも淮南の注にも推也とあり。

輶 藩車下庫輪也 藩車下卑輪

按ずるに藩車は説文繫傳に、卑輪は五經文字に合ふ。

輶 大車輶端持衡者也 大車輶端以持衡者也

兪 空中木爲舟也 空木爲舟也

按ずるに説文の窰字の解にも空中也とあれど、淮南汜論訓に「古は窰木方版を爲りて以て舟航と爲す」の注に窰空也と有るを用ふれば亦空木なり。

彤 船行也 船形也

按ずるに本書の筆誤。

舠 船行不安也从舟从朋省 船行不安也从則声也

按ずるに則字は誤れるが、朋声とせば段桂兩氏の説と合ふ。

艘 船着不行也 船著沙不行也

按ずるに廣韻にも沙の字あり。

般 辟也象舟之旋从舟从夊、所以旋也 辟也象舟之旋从舟从夊、般旋也

按ずるに段注に「般辟は漢人の語にして退縮旋轉の貌をいふなり」とありて象舟之旋は

其の退縮旋轉の様を云へるなり、さては般旋とあるも可。

津〔舟部の淮に从ふ字の條〕水渡也 水度也

方 象兩舟省總頭形 象兩舟省總聲也

按ずるに本書の誤

航 禮天子云々士持舟 天子云々士持舟

按ずるに持は本書の筆誤、天子云々は詩の傳及び爾雅の釋水に有りて禮の文に非ず、今本説文禮の字を衍せり。

汙 浮行水上也 浮於水上也

按ずるに華嚴經音義に引く所も本書と同じ。又一切經音義には浮水上行也ともあり、本書華嚴音義は最後の行の字を脱したるか。

淒 雲雨起也 雨寒起也

按ずるに本書寒字は雲の訛、雨雲起は初學記太平御覽と合ふ。

休 沒也 沒水中也

按ずるに小徐は沒水也に作れり。

沒 沈也 湛也

按ずるに席世昌の讀説文記に「上文に湛を沒と訓じたれば此の字も當に湛と訓すべし、

今沈に作れるは後人の亂し、所なり。沈の字は沒の義と異なり」と云へるは正に本書と合ふ。

滃 雲氣起也 雲氣起貌也

澍 時雨澍生萬物 時雨所以樹生萬物者也

按ずるに所以の二字あるも、樹に作るも俱に魏都賦や後漢明帝記の注と合ふ。

涑 小雨零貌 小雨落也

按ずるに小徐も也に作る。

瀑 一曰瀑資也 一曰賁也

按ずるに賁に作るは小徐と合ふ。玉篇は瀑を脱す。

湍 雨下也 一曰沸涌兒 雨下貌也 一曰沸也

按ずるに小徐にも沸涌也とあり。

潦 雨水大貌 雨水也

按ずるに一切經音義馬箭賦注ともに大貌の二字なし。

濩 雨流霑下兒 霑下兒也

按ずるに文選七命の注に引けるにも雨流の二字なし。

涿 流下滴也 流下適涿也

按ずるに滴涿は齊民要術の上火不落下火滴涿と同じく擬声語。

瀧 雨瀧々貌 雨瀧々也

按ずるに也に作るは小徐と合ふ。

淅 沛之也 沛也

按ずるに之字なきは小徐と合ふ。

泥 濡也 水濡貌也

按ずるに小徐本に小濡貌也とあるを桂氏は小當作水と云へり。

沼 泥水沼沼也 水泥沼沼也

按ずるに廣韻にも沼は水の泥に和せるものとあれば水泥や優らん。

洳 雷震洳洳也 雷震洳也

潒 潰也一曰潒陽渚在郢中 潰也潒陽浦在郢

按ずるに潰は小徐と合ふ。又楚辭九歌に望潒陽兮極浦とある洪氏補注に今澧州省有

潒陽浦といふは本書と合ふ。中の字段王二氏も用ひず。

渥 霑也 沾也

按ずるに霑は説文にては雨に屬する字なり。沾渥の語は毛傳考工記注にも見ゆれば

沾や優らん。

灌 灌也 沾也

按ずるに説文にては灌は水名なり、故に王氏は潒より以下七字の同義なるに同じから

ずと訝りたるもの。沾たるを知りなば王氏も地下に破顔一番せん。

泐 水石之理也 凝合之理也

按ずるに段氏は泐の訓は水の理、淺人水に理あるを知らずして石字を妄増すと云ひ、王氏は「水石之理の四字尙達せざるに似たり、或は闕誤有らん」と疑へり。鄭司農が考工記に注して「泐は石の解散するを謂ふなり」と對看すれば本書の文も極めて妙。

泣 泣下也 泣也

按ずるに泣下の義未だ聞かぬ所、本書に下字なきは較可。

清 幽溼也 濕也

按ずるに説文溼を濕の正字とす。

汗 涂也 塗也

湫 安定朝那有湫泉 安定朝那有湫淵

按ずるに段氏も云ふ「淵を泉に作れるは唐人諱を避けて改めたるなり」と。

汙 溫也 隰也

按ずるに桂氏も溫を濕と改むべしといふ、本書の隰は濕の誤。

澌 無垢蕨也 無垢也

按ずるに本書、小徐と合ふ。

澌 拭滅兒 澌澌拭滅也

按ずるに小徐澌を滅に誤るの外、本書と同じ。

澌 煮孰也 煮也

澌 浚乾漬米也 乾漬米也又曰浚也

按ずるに浚は抒也の解あれば、別に有るを優れりとす。

澌 浸沃也 漬沃也

按ずるに段氏も沃沃と改めたり。

澌 澌滓濁泥 澌滓也

按ずるに後漢書杜篤傳に引けるもの本書と合ふ。

澌 例出泉也 側酒出カ也

按ずるに桂氏も宋本玉篇に出酒とあるに据りて、上下の文皆酒と言へば疑ふらくは此も亦側出酒を云はんと云へり。本書に酒とあるは妙。爾雅釋名に澌猶傾也とあれば側の義も無かるべからず。

液 盡也 津也

按ずるに本書、小徐と合ふ。

灑 豆汁也 煮豆汁也

灑 (解は同文) 灑

按ずるに段氏も玉篇、廣韻皆灑に作れば古説文の此の如く作れるを知らる、集韻類篇始めて誤りて俗本説文に従へるのみと云へり。

沫 沫 古文沫从頁 類沫 説文此篆文類字也

按ずるに古文の形、説文今本は水に従ひ本書は𠂔に従ふの異あり。書の顧命の王乃洮類水釋文に説文作沫とあるは沫の古文を類とせるなり。

嶽 王者之所以巡狩所至 王者巡狩所至之也

按ずるに宋本に照せば本書之下に山字を脱す。所以の字は着落なし、故に段氏は「以は用なり」とし、王氏は之所以の三字を刪らんとせり。

嶽 山在齊地 山在齊也

按ずるに説文校議に「還の釋文に引けるに齊の下に地字なし、山水二部に地字を加ふるの例なし」と云へるは本書に協ふ。

嶽 舜所葬在零陵營道 舜所葬在靈陵葬營道縣

按ずるに本書の靈は零の、下の葬は郡の訛。零陵郡營道縣は漢書地理志の文。

舉 在弘農華陰 在弘農陰晉

按するに本書の訛。

嶽 在馮翊池陽 在馮翊池陽縣也

嶽 嶽嶽山也 嶽嶽山名也

嶺 嶺山在遼西 首嶺山在秦西

按するに本書は史記伯夷傳正義と合ふ。

岷 山無草木也 山无草木曰岷也

巒 山小而銳 小而高也

按するに王氏は御覽によりて山狹而高と改めたる、本書と近し。

巖 尤高也 、高也

按するに宋本玉篇に危高也とありて桂氏も之を用ふ。

墮 山之墮墮者 山之施々者

按するに字林には山之施墮者とありて兩書の一宇づつを合せたるも奇。爾雅郭注に

墮謂山形長狹者とあれば施々も妙。

嶠 山短高也 、高貌也

按するに宋本玉篇に短高貌とあり。

崇 嵬高也 嵬也

按するに本書又密字を出して説文崇の或躰とせるに今本説文之を佚せり。漢書郊祀

志に以山下戸封密高爲奉邑。

崕 一曰山名 一曰山谷也

嶠 嶠高也 嶠也

崕 山巖也 巖也

峴 山脊道也 小脊道也

按するに本書に峴の字重出して、下のは山とあり。

岨 陬隅高山之節 、隅而高下之節也

按するに而、也の二字あるもの一切經音義と合ふ。、下は筆誤。

崕 山名 丘也

按するに王氏は當に丘也と云ふべし、玉篇も字林も丘也と云へり、丘名にして山に従ふ、是を以て諸山の名と類列せずと云へるもの正に本書と合ふ。是に由りて觀れば上の崕字に山名とあるも不倫、本書の山谷也を用ふべし。

崕 會稽山一曰九江當崕也民以辛壬癸甲之日嫁娶

江當塗民俗以辛士癸早日嫁娶

按ずるに龠に二あり、一は左傳に禹會諸侯於塗山とあるものにて禹以後は會稽山と稱せらる、一は阜陶謨に予創若時娶于塗山辛壬癸甲とあるものにて九江郡に在り。この故に説文は兩義を出し本書は一方をのみ記せるなり。本書九字を佚し士卑の二字は誤る。

嵬 高不平也 高而不平也

按ずるに本書、一切經音義と合ふ。

岸 岸高也 高也

按ずるに岸は説文に水厓而高者とあれば岸の解としては無きが可。

崩 崩也 毀也

按ずるに説文古本考に古本有「曰毀也」四字今奪とあるは本書と合ふ。

廡 天子饗飲辟廡 天子饗諸侯辟廡也

廡 秋冬去春夏居 秋冬之春夏居之故爲寄

按ずるに太平御覽に引けるは春夏居秋冬去之に作る、本書秋冬の下に去を脱す。

庭 宮中也 向中也

按ずるに本書の筆誤。

廂 中庭也 庭中也

按ずるに段氏は庭の宮中につきて「下文に中庭と曰へば此は當に中宮と曰ふべく誤り

て之を倒にせしのみ」と云ひ、王氏は「庭には宮中と云ひ廂には中庭と曰ふは堂上の平地を皆庭と曰ふが故に之を宮中と曰ひ、廂は今の天窓に似て直る所たゞ一處なる故に中庭と曰ふ、庭に中するを言ふなり」と云へるが、本書のこの文を見れば兩氏の感いかゞ。

庠 庠也 説文庠廣雅庠大也

按ずるに本書は庠の解の廣を廣雅に目移りして佚したり。

蔀 芻蕘之藏 菊蒿示藏也

按ずるに本書の誤。

庾 水糟倉也 水糟倉

按ずるに槽は二徐今本の誤。

庠 蔽也 蔽也

庠 屋牝瓦下一曰維綱也 屋牝、下也一曰准結也

按ずるに本書の、は瓦の誤なるべく、牝瓦と牝瓦とは上下の別ありて牝瓦の下は則ち牝瓦なれば庠には牝瓦下と云ふを當れりとすべし（段氏は牝瓦を用ひて下の字を削りたり）。准結は誤あらん。

廡 屋階中會也 屋陸中會也

按ずるに獨斷に陞階也とあれば兩者大なる異なし。

崖 礙止也 礙山也

巖 安止也 安山也

底 山居也 止居々也

按ずるに前の二は本書止を山と誤り、後の一は説文止を山と誤る、段氏底を止居とせるは賢し。

廩 行屋也从广異聲 (𩇑)行屋下廩也今亦爲翼字

按ずるに翼も異聲の字なれど、爲翼字には翼に从ふが自然なるやうなり、萬象名義にも翼に从へる字たり。玉篇に下廩の二字多し、説文この前の字の廩には儲置屋下也、庶には屋下衆也と有れば下に涉る解あるもふさはし。

庫 中伏舍一曰屋庫 中休舍也一曰屋下也

按ずるに休は誤。

庠 儲置屋下也 儲買屋下也

按ずるに本書の筆誤。

廕 屋麗廕也一曰種也 屋蟲廕也一曰春也

按ずるに萬象名義にも春とあり。

厓 屋从上傾下也 屋從上頓下也

按ずるに説文の次の廢字の解も屋頓也なれば頓字も由あり。

廕 久屋朽木 屋木也

廕 屋迫也 遲迫也

按ずるにともに本書に脱誤あり。

廕 空虚也 空廬也

按ずるに萬象名義も本書と同じ。廬は廬の誤とすれば厓に由あり。

厓 山石之崖巖人可居 山石之崖巖人可居者也

厓 山邊也 上邊也

按ずるに本書の誤。

厓 一曰地名 一曰山石也

按ずるに廣韻に崑厓山崖狀也、俊韻 厓崑也、敢韻とあり、宋本玉篇に山石下(下は恐らくは也の誤)とあれば玉篇や優らん。地名とするには公羊傳の殺之嶽巖を引用すれど、殺こそ地名なれ嶽巖豈また地名ならんや、故に王氏も殺の地の險を形容すれば因て之を目して地名と爲せるのみと強辯せり。

底 柔石也 榮石也

按ずるに本書の誤。

厲 旱石也 摩石也

按ずるに唐寫文選集注殘本陸士衡答賈長淵詩注等に引けるは玉篇と合ふと周雲青云へり。

厖 治也 靡一治也

按ずるに玉篇の厖は厖非二字の誤りて合したるか。厖非一治也とすれば今の厖の數也(廣韻)の義に合ふ。

庠 唐庠石也 唐庠也

按ずるに廣韻にも磻庠とのみ出せり。

阨 石地惡也 石地也

按ずるに萬象名義にも惡字なし。

辟 反也 、也

按ずるに段氏も「俗本に譌りて反字に作る、今篇韻によりて正して仄に作る」と云へり、は仄の誤。

仄 側傾也 傾側也

厭 竿也 、

𠂔 仰也 魚毀切 、也之嚴反

按ずるに俱に本書の筆誤。又厚の下も本書は誤りて山陵の二字を合す。さて𠂔の音は荀氏の說文聲訂に「木部棚の下に齊にては之を檐と謂ふに作れば是𠂔は正字にして檐は乃ち後人續添の字なり、故に𠂔字は集韻に鹽嚴の兩韻に並收して音檐なり、大徐の魚毀切、小徐の語委反は皆危字の音に涉りて誤れり」と云へるにて本書の音の正しきを知る。

磻 銅鉄樸石也 銅鉄樸也

按ずるに文選注、一切經音義にも石字なし。

磬 石次玉者 石之次玉者

礪 厲石也 一曰赤色也 厲石赤色也

按ずるに廣韻にも赤礪石とあり。

碣 特立之石也 東海有碣石山 特立石也 東海有碣石

按ずるに桂氏は「東海は當に渤海に爲るべし、史記天官書に中國の山川は東北に流れて其の尾は勃碣に没す、漢書地理志に燕地勃碣の間、師古曰はく碣は碣石なり、郭璞の江賦の注に引ける伏琛の齊地記に勃海郡の東に碣石あり之を勃碣と謂ふ」と云へり。則ち碣石にて足りて山は衍ならん。

礧 春秋傳曰鄭公孫礧字子石 (礧) 春秋鄭公孫礧字石

按するに詩の公劉の釋文に説文云礧厲石と引ける、本書と合へり。そも／＼九經字様に礧音霞見春秋と出したるより二徐ともに礧 春秋傳曰鄭公孫礧字子石 平加切(大)と痕加反(小)と改めたれど、清朝の小學家皆その非を鳴らせる所。こゝに其の正しきを見るは愉快なり。

磧 水渚有石者 水渚有石也

按するに吳都賦の注も本書と合ふ。

礧 侈也 墮

按するに説文に侈落也臣鉉等曰今俗作墮とあれば異なるにはあらず。

碑 豎石也 臥石也

按するに臥は豎の下半を失ひたるもの。

礧 碎石墮聲 猝也石墮聲也

按するに萬象名義には猝と、宋本玉篇には石落聲とあれば兩義ならん。猝は碎の誤。

礧 石聲 石聲也一曰礧礧

按するに子虛賦にも礧々礧々を石聲とせり、一曰の二字衍か。

礧 餘堅者 餘堅也

按するに段氏も者を也に改めたり。

礧 礧石也 礧礧也

礧 石山也 山貌也

按するに段氏も礧礧二篆の解當に玉篇に依りて更正すべきに似たりと云へり。宋本

玉篇に礧々礧山貌 礧礧礧に作れるは原本よりも整へり。

礧 礧石也 礧也

按するに段氏も石を削れり。

碎 礧也 靡也

按するに礧の當らざるは段桂俱に之を云へり。玉篇の靡も蓋し礧の缺誤。楚辭招魂の王注に「礧は碎なり」と。

破 石碎也 碎也

砦 上摘巖空青珊瑚墮之 山墮山巖空

按するに本書の山は上の誤、下の山は衍にて正に説文の上句と同じ。青珊瑚の一句、玉篇之を略したるか、將衍なるか。

砧 以石扞繪也 以石研增繪

按するに萬象名義にも石研とあり、段桂二氏の扞に改めたるよりも普通ならん。本書

の増の字は衍。

礪 以石箸維織也

按ずるに雉は繳射飛鳥也とあれば無論通すれども、宋本にも維とあり。

礪 斫也 斫之也

礪 石也惡也 石地也

按ずるに鑿傳にも石地惡也に作れり。

省 魚列切 魚逝反

按ずるに萬象名義にも魚逝(今本遊に誤る)とあり。

防 地理也 地也

陰 閼也水之南山之北也 閼也水之氣也南山之北曰陰

阪 一曰山脅也 脅也

按ずるに本書防と阪との下に脱字、陰の下に衍文あり、周雲青は却ていふ「徐本氣也の二字を奪ふ」と陰は豈南山の北のみならんや。

陂 阪也一曰沱也 陵也一曰池也

按ずるに萬象名義にも陵池とあり。沱は段氏も池に改めたる所。

限 一曰門楣 一旦門櫓

按ずるに限櫓は互訓の字なれば本書の筆誤。

隄 隄隄高也 隄隄不安也

隄 隄隄也 高也

按ずるに萬象名義も隄に不安也とありて隄のは本書と同じ。

阨 一曰石也余準切 一曰地名切瑜劇反

按ずるに宋本玉篇に劇を劇に作るは受くる所あるなり。又石也の義の經史に見えざること正字通にも云へり。切は衍か也の誤か。

陜 阨陜也 、也

按ずるに、は恐らくは陜の説にて陜は即ち陝字なり。萬象名義にも陜とのみなり。

陷 一曰墜也 一曰隨也

按ずるにこの異同は上の碌の時と似たるも奇。

𨮒 𨮒也 𨮒𨮒也

按ずるに説文𨮒の下にも𨮒𨮒とありて此と相應ぜり、今本説文、脱文あり。

隕 下隊也 墜下也

按ずるに一切經音義に引けるも本書と合ふ。

隕 徐巡以爲隕凶也賈侍中説隕法度也班固説不安也

季巡説凶也賈侍中說法度也班固説不也

按するに李巡に尔雅注あり故に混じたるか、本書安の字を脱す。

頤 仄也 反也

阮 閔也 聞閔

按するに漢書揚雄傳に閔閔々其寥廓今とある其の閔閔(新附考に閔閔高門也とあり)を引きて閔に誤り又は阮を直に閔と見て連續したるならん。五經文字に阮音抗門高とあるも阮と閔との風馬牛ならぬを示すか。

防 隄也 得也

隄 唐也 隋也

按するに得は本書の筆誤。隋字も説文になき所、但し唐は大言也の字なれば隋や優ら

阢 石山戴土也 石戴土也

按するに萬象名義にも山字なし。

隤 崖也 厓也

隔 障也 塞也

按するに西京賦注に引けるも俱に本書と同じ。

障 隔也 、也

按するに本書の筆誤。

隈 水曲隈也 水曲隈也

按するに萬象名義に水曲とのみあれば、玉篇の文は水曲は隈の義ならん、則ち段氏の改めたと合ふ。

冑 冑商小塊也 遣適小塊也

隄 水衡官谷也一曰小谿 水衡官名一也一曰未谿也

按するに「水衡官は漢書の百官公卿表に見ゆ」とは段氏も知りたれど谷とある故に未詳に附し、朱氏は漢書の「天文志に解谷あり」と提供せしが、本書の文を見れば啞然たらん。本書にも筆誤あり。

附 附婁小土山也春秋傳曰附婁無松柏 附、小土山也春秋附婁無松柏

按するに今本左氏傳には部婁とあり。

陔 酒泉天依阪也 酒泉天依阪也

按するに天依阪は地理志と合ふ。

陝 弘農陝也古虢國王季之子所封也 農陝古虢國也野王案季之所封也

按するに本書は弘字王字子字を逸す。さて周雲青は慧琳音義にも「今の弘農の陝縣は

古の虢國なり」と引けば説文の王季以下は竄入なりと云へり、されど予は下の陳の條に舜後嬀滿之所封とあるに并看して王季以下も許氏の原文にて、淺人が王字に誤られて野案兩字を加へたるならんと思ふものなり。

隤 弘農陝東聚也

陃 河東安邑聚也

按ずるに王氏は陃の字未だ何の義なるかを詳にせずと云へるが聚字なれば何の未詳か有らん。

隋 上黨隋氏阪也

按ずるに陵は筆誤。

隋 水中高者也

按ずるに才は中の筆誤、王氏は之を庾儼默の注と云へるが玉篇に引くを見れば猝に従ひがたし。

陞 耕以甬浚出下墟土也

按ずるに本書の後は筆誤、又陳字の解も本書に筆誤あり。

陶 陶丘有堯城堯嘗所居故堯號陶唐氏

按ずるに本書の誤もしくは脱。

除 殿陞也

按ずるに文選注太平御覽に引けるも階。

陞 升高階也

按ずるに本書は小徐と合ふ。

隙 壁際孔也

按ずるに文選詠月詩注に引けるは本書と合ひて段氏も孔字を除けり。

陴 城上女牆俾倪也

按ずるに左傳宣十二年の杜注に陴城上俾倪とあれば女牆俾倪は同物なり。之を疊言すること通例ならず、恐らくは俾倪の二字は旁注の竄入。

陼 依山谷爲牛馬圈也

按ずるに國は筆誤。

阪 水阜也

按ずるに萬象名義も小に作る。

墮 敗城阜曰墮

按ずるに敗城阪成その形近し、何れの誤れるかを詳にしがたし。

闕 塞上亭守烽火者

按ずるに説文火部に燧燧候表也とある如く烽火その物をいふべき文字なるに、今本説文の如くにては之を守る人とならずや。

壘 累壘也 壘壘也

按ずるに壘は令適未燒者にて今の磚の燒かぬ前をいふ、壘は阮なれば非。段氏は宋本の壘亦作壘を見て玉篇之注甚誤と云へれど、原本は聲類亦壘字也、壘軍壁在土部と云へるにてこの二字を別ちしを知るなり。

鱧 魚名 魚也

按ずるに鱧傳も也に作る。

鰓 鰓也 鰓也

按ずるに本書別に鰓也を引けば此の筆誤ならぬは明かに、萬象名義亦鰓鰓の二を出せり。

紉 絲蔓延也 絲蔓延也

紉 繭滓絰頭也 一曰以囊絮練也 繭滓絰頭以作繭絮一曰繫紉也

按ずるに太平御覽に引けるにも紉一曰牽縈とありてそれと繫紉とは音轉なれば本書の方備れり。

紉 樂浪挈令織 樂浪挈令織字也

紉 機縷也 機上縷也

綜 機縷也 機縷持絲交者也

按ずるに一切經音義に引けるも本書と合ふ。

絡 緯十縷爲絡 (絡) 維十絲爲絡

按ずるに王氏も[集韻に絲十を綸となし綸倍を絡となし、絲を以て計るにて緯を以て計るに非ず]と云へり。各に従ふは本書の筆誤。

緯 織横絲也 横織絲也

按ずるに太平御覽に經織從絲とあるより推せば本書は誤倒か。

納 絲溼納々也 絲溫納々也

按ずるに劉向の九歎に衣納々而掩露の王注に納々溼濡貌とあれば本書の誤。

紡 網絲也 、絲也

按ずるに網絲の當らぬは段氏既に云へり。六書故に蜀本作拗となり、本書の、は拗の缺けたるものか。

絕 斷絲也 斷也

緩 偏緩也 徧緩也

緇 施絲也 耗絲也

按ずるに萬象名義にも耗絲とあり。

縮 一曰蹴也 一曰蹙也

按ずるに儀禮にては縮の古文蹙に作れる多し、本書や平明。

綦 約也 絢也

約 纏束也 纏也

纏 繞也 約也

紵 轉也 縛也

纓 落也 是也

按ずるにこの五字の解、萬象名義も本書と同じ。

締 結不解也 不解也

綱 急引也 引急也

按ずるに萬象名義も同じ。

纁 不均也 不紉也

按ずるに本書は別に不均也を引ければ筆誤にはあらず。されど紉の字こゝに適せず、廣韻に不細也とあれば或は紉は細の誤か。

終 練絲也 練絲也

按ずるに説文に練の字なし。

繒 帛也 帛總名也

按ずるに一切經音義も本書と同じ。

緯 漢律祠宗廟丹書告 漢律宗廟祠丹書告曰也

紕 漢律曰綺絲數謂之紕布謂之總綬組謂之首

漢律綺絲數謂之純希謂之稷綬組謂之逆

按ずるに組は維の、本書の純は紕の誤。總綬維也は説文の文、數希相對するは常言、本書の文にして義始めて通ず。

綺 文繒也 有文繒也

縠 細縛也 細練也

按ずるに萬象名義も俱に本書と同じ。

縑 并絲繒也 兼絲繒也

按ずるに説文詁林の沈乾一の記に本書の此の文を引きて「兼絲の繒とは釋名の釋采帛に縑は兼なり其の絲細緻にして數、布絹よりも兼ぬるなり」と有るは自ら釋名を引きて兼絲を證せるなり。然るに又縑字の條にては「唐寫本玉篇云々野王又釋名の釋采帛を引きて云々」と云ひて之を野王に託したるは捧腹の至なり。

縛 白鮮色也持沅切

(續) 宜轉反 一曰鮮支也

按するに此の字の音周禮音義に居援反、徐升卷反、沈升絹反とあるは絹の義、左氏音義に直轉反とあるは卷の義の時なれば説文に持沅切たるは非なり。又綿の義の時、白鮮支と解すべきなれば説文今本も本書も各誤れり。

縞 鮮色也 縹鮮支也

按するに縞を鮮支と解せるは漢書の顔注、纂文あり。縹は恐らくは衍。

練 練縞也 練縞也

纁 粗緒也 粗紬也

按するに王氏は「字、緒」と類列せざれば緒の粗なる者と謂ふ能はず、且綺より縵に至る十二字皆縞帛の名なる故に段氏は粗緒の縞名たるかを疑ひぬ」と惑ひたるが、粗紬なれば渙然たらん。

縿 縿縞也 一曰有齒云々 縿縞也 一曰云々有縿

按するに縿は説文に刺也とあれば、新附字にても縿が適切なり。

縗 縗也 縗也

按するに本書の誤。

絹 縞如麥稍 生霜如陵稍也

按するに絹生縞也は字書の文、今本説文生字を佚す。本書に筆誤多し。

綠 帛青黃色也 帛青兒色也

按するに本書の誤。

緇 一曰育陽染也 一曰一陽染也

按するに宜しく清に作るべく、俱に誤。

絳 純赤也 純赤縞也

絳 大赤也 大赤縞也

緇 惡也絳也 惡色絳也

按するに上の也の字、段桂王氏みな苦められしもの。王氏の釋例に絳、縵、絳、緇が上下帛を言へる中に介して帛を言はぬを怪しみたるが、本書によれば縵の外は皆縞を云へり。

縵 春秋傳縵雲氏禮有縵緣 春秋傳有縵雲氏祀記有縵緣也

按するに傳の下に有の字あるべきこと王氏も云へり。段氏は玉藻の朱錦につきて朱錦爲緣豈即縵緣與と云へるが果して然らば禮(祀は誤)記とあるも妙。

緹 帛丹黃色也 帛赤黃色也

按するに一切經音義にも赤とあり。

縵 帛青色 青白色也

按ずるに萬象名義にも青白とあり。

紺 帛深青揚赤色 白深青而楊赤色也

按ずるに一切經音義十四に引けるは本書と同じくして白を帛に作る。楊は訛

緹 未嫁女所服 女所幣也

按ずるに詩の鄭風の傳にも女服とのみあり、幣は恐らくは服巾の二字の合ならん。又

說文今本は緹綦の二形とせるが本書も萬象名義も緹綦の二形。

縹 或曰深縹 或曰深霜

按ずるに本書縹を霜に作ること縹の條と同じ。

纁 帛雀頭色一曰微黑色如紺纁淺也

帛雀頭色也一曰微黑色也一曰如紺也一曰淺也

縹 帛離色也 帛離色也

按ずるに離に作れるは韻會と合ふが、萬象名義も馬に从ふ字。

緹 帛戾艸染色 炭染也

按ずるに戾は諸家も炭に改めたる所。

綦 白鮮衣良 穴謂之一

按ずるに本書の誤。

縹 繁采色也 繁采飾也

按ずるに本書は萬象名義文選月賦等の注と合ふ。

紵 縹卷也 縹也

按ずるに萬象名義にも卷字なし。

紵 冕冠塞耳者 冕冠垂塞耳也

纁 冠系也 冠系也

按ずるに本書に誤あらん。

紵 系冠纁也 繼冠纁也

按ずるに小徐韻譜本も繼に作る。

緹 織帶也 織成帶也

按ずるに李善七啓注にも成字あり。

縹 綦維也 紵一也

按ずるに本書に誤あらん。

縹 綦紫青也 綦紫青色也

按ずるに萬象名義後漢書西域傳注にも色字あり。

組 其小者以爲冕纁 其小者以爲冠纁

按ずるに李善注七啓にも冠に作る。

纂 似組而赤 似組而赤黒也

按ずるに萬象名義にも黒字あり。

紐 糸也 絲也

按ずるに萬象名義にも絲とあり。

綸 青絲綬也 糾青絲綬也

按ずるに西都賦注にも糾字ありて段氏之に据れり。

紕 系綬也 絲綬也

按ずるに系の絲たるべきは段氏も云へり、綬は誤。

縹 細疏布也 蜀細布也

按ずるに萬象名義にも今本説文の如し。

褱 頸連也 領連也

按ずるに萬象名義にも領に作りて段氏の考定と合ふ。

紵 衣系也 衣絲也

按ずるに絲は誤。

縹 縹貉中女子無紵以帛爲脛空用絮補核名曰一衣

縹貉民女子無紵以帛爲脛空同補絮核名曰一衣

按ずるに縹貉は即ち縹貉にて夫餘の國名なれば縹に作るは非。中、民は兩可、その他は本書の方讀を成しがたし。

紵 條屬 扁諸屬也

按ずるに條と扁諸と同じきこと條字の段注に見ゆ。

紵 采彰也一曰車馬飾也 采也一名事馬君也

按ずるに萬象名義にも彰字なし。又車馬飾を段氏は車馬帟に改めたるが玉篇之に近し。

紵 紵屬 紵屬也

按ずるに紵字説文になし。

紵 援臂也 紵臂也

按ずるに段氏等は援を揜と見て説けるが、紵は縹也なれば同じき結論を得ん。

縹 維綱中繩 維紵中繩

按ずるに維紵の語は綱字の解にも見ゆ。

縹 持綱紐也 維持維繩紐者也

按ずるに縹は侯綱にありて綱綱にあらざること王氏の説なり。さては維繩も佳。

縵 絳綫也 縫縵也

按ずるに縫とは桂王兩氏の改むる所。

縵 縵衣也 縵縵一也

按ずるに一縵は同字、本書に誤あらん。

紕 縫也 縫衣也

按ずるに一切經音義に引く所本書と合ふ。

縵 衣戚也 衣蹙也

按ずるに段氏は「戚は今の蹙字なり、古多く戚を用ふ」と云へり。

結 論語曰一衣 論語一裘

按ずるに論語に「裘」とあるものにて、本書にはなほ「字書亦裘字也」の解もあり。段氏は宋本玉篇等によりて衣堅也の三字を補ひたるが「結堅也」は蒼頡篇の文なることも本書によりて知られたり。堅を本義とすれば説文に論語を引けるは引經證字とす。知らず萬象名義に堅とあるは本書に据れりや否やを。

緇 刀劍緇也 劍維也

按ずるに萬象名義も本書に同じ。

縵 戟衣也 戟徽也

按ずるに徽は説文に「邪幅とありて、其は今の行膝の如し」と詩の「鄉箋」にも有り。さては戟をつつむものにもふさはし。

縵 扁緒也 編繩也

按ずるに集韻は本書に同じく、萬象名義にも繩と有り。

徽 一曰大索也

按ずるに文選西征賦注に引けるにもこの一解あり。

紕 縵繩也 禪繩也

按ずるに「禪を禪とすれば桂氏の改めたと合ふ。

紕 紕未縵繩一曰急弦之声 紕縵繩也一曰急殆之声也

按ずるに縵繩也は儀禮釋文一切經音義に引けるに合ふ。紕の字は縵也の解あるより紕縵と重ねたるか。王氏は紕字句絶と云へど然らば也字あるを例とす。

縵 乘輿馬飾也 一紕乘輿馬飾也

按ずるに、段氏「紕」の二字を補へる卓見服すべし。

縵 馬髻飾也 馬髮髻飾也

縵 馬縵也 馬縵也

按ずるに萬象名義「縵」には馬髮、縵には縵馬とあり(但し「縵」は同字)。

纒 漢令蠻夷卒有

(纒)漢書蠻夷本今有泉纒也

按するに本書の本は卒の誤なるべし。―が前の兩足を絆ぐの義なるからには泉字にて其の材料を示すも亦可ならずや、泉は麻なり。

繩 大索也 索也

綰 治敝絮也 結治敝絮也

按するに萬象名義にも結字なし。

緝 釣魚繳也 (紙)釣魚繳也

按するに萬象名義にも民に从ふ。

紙 絮一苦也 簪也一曰絮也

按するに萬象名義にも簪絮とあり。さて今本説文一たび誤倒せしより(苦を小徐は簪に作る)段氏は絮一箔也として蔡侯紙を以て之を解し、諸家亦之に従へり。蓋し蔡倫の紙は後漢書の其の本傳に元興元年に奏上せりとあれば説文の成りし永元十二年よりは六年の後なり。説文の成れるは古牀古義を跡づけるにあるに、今發明中の又は世に出でたるばかりの物を以て之を釋する理あらんや。此等の解みな時代を錯誤せりといふべし。簪は竹簪々々又楚にて竹皮をいふの語なれば蔡侯紙の成るや其の平滑竹皮の如きを以て之を紙と呼びしならん。釋名に紙は砥なり平滑なること砥石の如きを謂ふなりと云へる如きは紙の名定まりて後に牽合せしもののみ。

絮 敝綿也 幣帛也

按するに萬象名義にも幣帛とあり。

絮 絮縑也一曰敝絮 縑也一曰弊絮也

按するに絮字なきは易釋文に、絮に作るは易公羊釋文と合ふ。

纒 一曰維也 一曰絰也

按するに維が絰の誤なるべきこと段注訂に見ゆ。

縑 一曰蹴也 一曰織也

按するに段注蹴を威蹙の意に改めたるは却て織に近し。

紵 細者爲紵粗者爲紵 細也

縑 兩麻一絲布也 兩麻絲布也

紵 一貫布也 一幣布也

按するに―幣の語は急就篇に見ゆ。

縑 交帛也一曰縫衣也 交帛也一曰縫衣也

按するに萬象名義も本書と同じ。

屨 青絲頭履也亡百切 素絲繩履也胡瓦反

按ずるに方言に「屨、龜屨也」と云へば、繩屨とあるに適ひ、且廣韻にも繩屨と云へり。又亡百切は从糸戸声に由なし、説文の讀若阡陌之陌と俱に竝改あらん。

綱 履兩枚也。一曰紱也。履兩頭也。一曰紱也。

按ずるに王氏の釋例にも顧氏の據る所を説文の眞本なりとせり。萬象名義亦紱の字。紱、氏人殊縷布也。立人疏婁布也。説文と有るべきを記文と誤る。

按ずるに段氏は殊縷を「其の縷色を殊にして相間へて之を織る」と解せしが、疏縷ならば平明なり。

紉 亂系也。亂麻也。

按ずるに萬象名義にも一切經音義にも麻とあり。

紕 氏人縷也。燕人縷也。

按ずるに纂文に紕氏縷なりとあるは説文と合ふ。

縹 西胡毳布也。西故毳布也。

綌 車中把也。車中扼也。

按ずるに把は把に改めらるゝが通説、扼も亦誤。

紕 織絹从糸貫杼也。織緝以絲貫杼也。

按ずるに本書の緝を絹の誤とは王氏も云へるが、以は諸家の採る所。

紕 箴縷所紕衣。鍼縷所紕紕文也。

按ずるに段氏は箴を改めて鍼とし、王氏は衣を衍文とせり。

緋 合五采鮮色。合會五采鮮色。

按ずるに萬象名義にも合會とあり。

緋 會五采鮮色。會五采緋也。

按ずるに段氏も也に改めたり。

索 艸有莖葉可作繩索。艸木有莖葉可作繩索也。

按ずるに木にても索となるべき者多し。木字あるや優らん。

下の四字は車部に補へる十字中説文を引きて異文あるもの。

輶 大車簣也。車簣也。

輶 淮陽名車穹隆。淮陽名車穹隆爲一。

按ずるに段氏も集韻に引けるによりて爲字を加ふ。又段氏は「此の篆は當に上の『輶は蓋弓也』と伍を爲すべく、輶は其の分を言ひ」は其の合を言ふなり、此に厠へたるは後人之を亂しゝならん」と云へど、顧氏の見たる説文亦輶輶輶と相次したりしなり。

輶 大車駕馬也。大車駕者也。

按ずるに段氏も者字を加ふ、蓋し本書は馬字を脱す。

羴 却車抵堂爲羴

部車抵堂也

按ずるに部字は筆誤。

以上四百四十二條、寫本の常として筆誤も少からざれども他書に徴し意義に照して玉篇の優れる者多く、往々段桂王諸氏の考定せるものと一致せり。此等に對しては坐るに諸氏の冥搜暗索の苦辛を想ひて一掬の涙さへなき能はず。

又原本玉篇の注によりて以て今本説文の誤を正すべき一二を擧げんか。今本説文の言部訓字の次に諛字ありて曰はく號也从言从虎乎刀切と、されど經傳に所見なし。原本玉篇には此處の字徒泥反と音して虎に从へり。諛字は方言にも南楚或謂支註曰諛と云へば宜しく説文に有るべき字とす。翻りて篆隸萬象名義を見るに亦訓の次は達泥反(泥の字を誤る)の字なれば説文の諛は諛たる事著し。此く見んに撞着する嫌あるは原本玉篇や、後に諫士漬反説文數諫也、諛息移反説文數諫也(萬象名義も同じ)と見えて別に諛字を出せることなり。而るに今本説文には其處に諫數諫也の一字あるのみ。よりて思ふに數諫也の諫は後に諛の異舛を孳生したるを以て玉篇名義は之をも連ねて出せるにて、形こそ同じけれ徒泥反の字とは全く別なるべきなり。其は説文に數諫也と解せるは諫の一字なるに數諫、數諫として二様に引けるにて知られぬべし。此の如くなれば今本説文の諛は諛の誤とすべく、その音をも乎刀切と有るは徐鉉が音を附する前に既に誤れるか又は淺人の後に改めたるかとすべし。

廣韻胡刀切(乎刀切と同母)に諛字を收めず、宋本玉篇またこれを收めぬは徐鉉の据りたる本よりも善きものに從ひたるか。又廣韻諛息移切數諫也諫也、諫數諫也とあるも兩字の同義異形なるを知るべし。

同部許の解に曰はく齊楚謂信曰許とこの信の字に着落なければ段氏は當に大に作るべしと云ひ、王氏は諛言は信ならぬに亦許を以て信となすは徂は存なりの比と云へり。獨り錢氏は方言を引きたる後、此に信を謂つて許と曰ふとあるは當に誤なるべしと云へるが、原本玉篇を見れば方言の許嗟也中齊西楚之郊曰許を引きて信を謂ふものとせざるは今本説文の衍文あるを證するに足らん。

同部鹽の解に曰はく相毀也雖遂切と、然るに廣韻には相毀之言許規切たり。今原本玉篇を見るに亦虛規反とあれば今本説文の誤れるを知る。

同部に諛諛の二字ありて諛に行之迹也神至切諛に笑兒伊昔切と解せり、玉篇には(諛)の形のみにありて時志反諛法諛者行之迹也と見ゆ。諛を笑聲となすの字林に起れるは五經文字の明言せる所なれば説文に其の字無かりしこと段氏の力説せる所、氏は玄應書と五經文字と廣韻と六書故とによりて諛の有るべからざるを證せしが、此等よりも更に古き玉篇に諛に作るを見たらばいかに喜びけん(宋本玉篇には諛諛同上諛に作れば段氏も玉篇を援くを得ざりき)。

欠部大徐本は第二十字に歎を出して歎之に次ぐ、小徐本は第廿二字に歎を出して歎は遙に

未なり。原本玉篇の次第は小徐に同じく篆隸万象名義亦然れば小徐の正しき知るべきなり。こゝに於て吾人の感服せざるを得ざるは繫傳校録の説なり。曰はく

玉篇欠部歔字の次第は説文と相當らずといへども然も自ら前に在り、歔字は歐の下咳の上に在りて正に相當れり、(慎吾いふ繫傳のと相合ふを指す)。其の歔字の注に曰はく鳴歔也と、歔字には則ちたゞ口相就の一説あるのみ(又いふ、此は宋本玉篇の引ける所によりたるなり、原本には、心有所惡者也又曰二口相就とあり)。玉篇、心有所惡若吐の一義を逸す、こゝを以て大徐誤りて兩義を合せて一義となして移して相從はしめたるなり(又いふ廣韻に歔、歔歔也。嘔、歔歔口相就也とあり、嘔嘔は同字なれば歔歔は口相就の義となるに歔に口相就の義をのみ出したれば、大徐之によりて歔を歔の上に移したるもの、もし心有所惡の解が歔の下に在らば吐也の歐の下、逆氣也の咳の上より移さざりしならんといふ意)

この説は繫傳の次第を支持したるに過ぎざれども、推理的に原本玉篇を通じて知らるゝ説文の眞を看破したるは偉ならずや。たゞ心有所惡若吐の解は大徐本自ら之を記せるに玉篇に無しとて之を考慮せざりしといふは聊か當らぬ嫌なきか。

飴、食部に饑 飴 糞 飴籀文と出し、玉篇には饑 糞 饑籀文 飴 饑 飴籀文とありて糞を一は飴の、一は饑のとするの齟齬あり。説文に糞を以て飴が異の省に从へるものとすれど、異は界と丌とに从ふ字なれば共にては不成字なり。之を饑の籀文として雍共同韻たるに依るに如

かす。蓋し今本説文は飴の籀文を脱したれば糞を拉し來て従つて之が辭を爲しゝのみ。

𠂔部の文七重三は𠂔𡗗典簣𦏧𦏩𦏪𦏫𦏬と出せるに、玉篇は𠂔𡗗典𦏭𦏮𦏯𦏰𦏱𦏲𦏳(簣は別に竹部に出すが玉篇の通例とす)とし、之を對看すれば(一)𦏴の字の所在(二)𦏭以下四字の次序の同じからざるを知るべし。この(一)については王氏も「𦏴の字は當に典の下に在るべし、尊閣の意と相類すればなり、且𦏭𦏮相次ぐも其の別を昭にする所以なり」と云へる所、(二)については𦏭の字を𦏭の篆文(説文)𦏭の篆文(玉篇)とすると、其の音を蘇困切(説文)先頓反(玉篇)とするとの異ありて、隨て𦏭の音も蘇困切(説文)助鬱反(玉篇)に分れたり。篆隸萬象名義亦𦏭を𦏭と同字とし、𦏭の音を助鬱反とせるも且つ𦏴の字を此等の字の後に出せるも玉篇に同じければ今本説文には誤あるなるべし。

水部に溢字を出し从水益聲とあるが益既に水に从ふならずや。原本玉篇には𣶒を本文として説文を引き𣶒を聲類の𣶒字とせり。蓋し水の盃上に有るは増益、皿旁に在るは滿溢とせる極めて條理明かなれば許氏の眞ならん。而も此は清朝小學の大儒も夢想せざりし所。

𩇛部に大徐には𩇛陋也从𩇛𦵏聲𦵏籀文𩇛字烏懈切𩇛籀文𩇛从𩇛益と出せるに小徐本には𦵏籀文𩇛字の五字なくして、且𩇛を篆文とせり、然るに玉篇には𩇛於賣反說文陋也字書今爲𩇛字也在阜部とあり。按ずるに玉篇の篆𩇛は誤れりとして、說文に既に𩇛字を出せるならば直に之を引ける可なるに、今別に字書を引けるは何故ぞ。蓋し今本說文は二徐俱に誤れるにて、

韻が籀文の益なる苴(說文これを啗の籀文と云へれど、益のゝなること漢書の百官公卿表の韻注に見えたり)に从へると今舛の益に从へるとの二舛に作るべきなり、その證は慧琳の一切經音義卷四十一に隘 說文作𨾏又𨾏並古字也今从省作隘隄並正也とあるにて明白なり。この𨾏の一𨾏を省きて隘とせるは字書なるが故に玉篇も然引かざるを得ざりしなり。これ亦玉篇の光によりて說文の誤を照せるものといふべし。

糸部に續の次に賡古文續とあり、校議に「賡は續と訓すべけれど即ち續字には非ず。益稷釋文に說文以爲古續字といふ、按ずるに以爲と言ふにて六朝の舊本尙誤らざりしを知らる」と云へるに、玉篇果して續の下に賡を出さず。萬象名義も亦續字のみなり。

同部緝の次に紃を出せり、錢坫は宋本玉篇に紃に作れるに據りて

紃素の字ならば當に縹緋等と類を爲すべくして應に此處に在るべからず、疑ふらくは傳本の誤ならん。俗人紃を見ること多く紃を見ることが少ければ一字を刪りしのみ。

と喝破せしが、原本玉篇も又紃に作りて、紃は遙に末に在りて淮南子の許注の紃素也を引くのみなれば錢氏の明の神に通ずるを知るなり。

今此の節を終ふるに當りて玉篇がいかばかり說文に頼りたるかを檢するも無用ならざらん。今食部全部完存せる故に(を見るに、說文の同部の文六十二はすべて玉篇にも存し、而して玉篇の解に說文を引けるもの四十五字なればこの他の十七字は說文を引かぬことゝなれど、

仔細に之を見れば

食 一米の解が通じ難き爲に避けたるか

饌 爾雅郭注を引きたる中に說文の義も含まる(以下書名の上に止む)

饍 詩の毛傳

簋 儀禮の注にて說文のゝ義を兼ね

饍 韓詩外傳

饍 毛詩

饗 の字につきては孔穎達が詩七月の正義にて「郷飲酒は禮尊く事重きが故に饗を以て之を言ふ」と云ひたるを、段氏は「宮燕の宮は正しくは宮に作りて宮は献なり、饗に作るは同音假借字たり」と斥け、王氏は「許君が詩七月の朋酒斯饗に本づきて説をなしゝは字郷に从へばなり、郷飲酒には涉るなし」と云へり。然るに顧氏は饗字の用を亦「禮尊く事重し」のものとせること玉篇の引例にて明かなれば說文を引いて之を撞着せしむるを避けしならん。此くて吾人は孔疏の説の亦本づく所あるを知るなり。

饗

饗 ともに方言

饗 左傳の杜注

飫 顧氏の意は燕食の字は飫とし、此は厭飽となす故に

餞 孔傳韓詩

饕 左傳の杜注

饒 論語注

饑 爾雅

饑 同上毛傳

倭 論語鄭注にて之を兼ね

にして十四字は其の義を用ふれど、複出を避けんが爲に説文の名を出さざる者、食饕飫の三字は顧氏別に意ありて雷同せざりしものとは知らるゝなり。

説文にいはゆる新附字あり、嚴鐵橋は曰はく「新附字は何許の人に出でしかを知らず、釋文は陳時に成りて新附字を引けば是六朝の時に已に之有りしならん」と云へり。今玉篇に説文以外の字を引く多し、嚴氏の説の如くならば新附字は説文部内の字に次ぎて出さるべき理なり、然るに

食部の新附字 饒部内最終の字より五十九字目

饒 收めず

糸部の

細部内最終の字より六十六字目

糸部の新附字

緋部内最終の字より十五字目

緋 同 八字目

緋 同 七十二字目

練 同 七十三字目

絳 同 五十六字目

緋部内の字の間に介在す

絳 同

にて然る形迹なし、嚴氏の説恐らくは非ならん。

田伏侯氏の一切經音義引説文箋の一書は其の用力まさに今、原本玉篇に向ひて爲しゝと同じ、但田氏のは二徐に異なりとも僅に字句の間の繁簡の不同並に訓義に害なき者は存して論ぜず」といふ舛例なること稍わが業と廣狹の差ありといふべし。同書に録せられたるものに原本玉篇にあるべきもの四十一字あり、その中訥軌旒の三字は玉篇に存せぬ部分なれば其の他の三十八字をこゝに出して玉篇の所引と相比較せん

謝 卷三引きて辭也に作る、蓋し古、二訓ありて慧琳たゞ其の一を引くもと皆漢文。

今「辭也」をよしとせると合ふ、さては謂相辭謝也は顧氏の下せる語か。

譏 卷六十四に引きて欺調也に作る、二徐本「駭也」に作れるは義に取るべき無し、たしかに

誤字に係る。

玉篇には哈也とあるによりて今、唉字の誤かと云ひたるが欺調とはなほ遠かりけり。

誣 卷八十九卷五十一・卷五十八に引きて加言也に作る。

今も言字あるを用ひたり。

誦 卷三十二に引きて誦也に作り又他卷に引く所に皆誦也に作る。二徐は誦也に作る。慧琳玄應據る所が誦字と互訓とせるは甚だ當れり。二徐定めて誦字と互訓となししは誦の下に周書の無或誦張を引けるもの幻觀の義となしては類せざるを以てなり。

玉篇にては誦誦兩字を同字とせれば二徐の如く誦を誦の互訓とはなしがたし。但し誦の下に説文を引かねば顧氏所見の説文のいかなりしかを知り難し。

訾 卷七十五に引きて思稱意也に作る玄應音義の引く所を案するに量也思也稱意也の三訓あり、その他の諸卷に引く所もたしかに不字なし、稱意とは韓詩にいはゆる不善の意なり。

玉篇にも不字なし。

嚳 卷一嚳字の下に云ふ説文に涉水則嚳噉古文作𪔐亦作𪔑と、二徐本嚳に匹也と訓す。

按するに慧琳嚳を以て嚳の或𪔐となすは説文の匹と訓すると合はず。易の復の釋

文禮の少儀の釋文に頻本作嚳と云ふ、是頻嚳一字たり。廣雅釋詁に頻比也、詩の桑柔の箋に頻猶比也と、これ嚳の匹と訓すると頻の比と訓するとは相近し。

鄭箋廣雅に頻比也とあるは玉篇に嚳比也とあるの正しきを證するものならずや、田氏嚳嚳の一なるをいふに急に於して比也の解のよきを看過せり。

誕 玄應の引けるにも亦[詞誕也]の一訓あり。

玉篇は調誕(黎本は調誕に作る)に作れり、玄應のも調誕の誤か。

讐 卷五十六に引きて失氣也讐怖也一曰言不止也に作る。

この引文玉篇と合ふ。

乎 卷四十一に説文云語之餘聲也と引けり、舊本に聲字有るを證すべし。

玉篇には語之舒也と有れば必ずしも聲字ありと云ひがたし。

號 卷七十四に引きて痛聲也に作る、案するに慧琳は考聲を引きて大哭也痛聲也と云へば此の訓義も或は考聲の訓義たるを誤りて説文と爲しゝならん。

考聲も亦号の訓義を誤引したるに非ざるか。

𪔐 卷四十三卷五十八に引ける皆急也告之甚也に作る。二徐本、急告之甚也に作りて急の下に也字を奪ひて遂に詞を成さず。

玉篇も也の字あり。

漱 卷六十六に引きて欲飲也に作り、小徐本も同じ。

予前には玉篇の須飲を支持せしが、音義も小徐と同じければ再考。
歇 卷五十八に引きて咽中氣息不利也に作る。二徐本に氣字なきは按ずるに奪。

玉篇にも氣字あり。

歉 卷九十七に引いて不飽也に作る。

玉篇に食不飽也とあるは更に詳。

餽 卷十四に引きて日加申時食也に作る。

玉篇に食字なきは粗。

次 卷三十六卷三十八卷六十八卷八十一卷八十五に引きて皆に液也に作る。二徐本下

文漢字貪欲の義に涉りて慕欲の二字を増せども各卷皆無し。

慕也欲也口液也の三解の中の一解をのみ音義に引けるなり、三解より成るを知らずして慕欲の二字を去らんとするは武斷なり。

差 卷十六に引いて貳也不相値也に作る。

玉篇に誤字もあれど是と合ふ。

瀆 卷二十九に引きて上古時雨所以潤生萬物也に作る、玄應音義卷一に引けるも同じ、今本は上古の二字を奪失せり。

所以の二字あるべきを證せられたるは嬉し、時雨の徳は上古のみならじ。

潦 卷十九に引きて雨水也に作る、許書の古本に大貌の二字なし。

濩 卷二十卷二十四に引きて皆雷下貌に作る。

ともに玉篇と合ふ。

淤 卷八に引きて滓也に作る。二徐本に澱滓濁泥也に作るは亦引釋の語に係る。

玉篇に澱滓也とあるや優らん。

崇 卷一に引きて高也に作る。二徐に本崑高也に作れども古本並に崑字なきなり。

玉篇には却て崑也とあり、猝に古本に崑字なしとも定め難し。

礪 卷九十九に引きて石似玉也或从玉作礪に作る。二徐本は石次玉者に作る、玉部の似

玉次玉は訓義相近し、慧琳が引きて似に作るは或は傳寫本此の如く作るに係らん、重文は二徐本奪去せり。

玉篇も石之似玉者に作れり、或作璵在玉部とも有れば説文もと或璵有りしならん。

隄 卷三卷六に引きて隄隄京也に作る。二徐本に高也に作るが案するに小徐に京高邱也と云へは小徐の原本京也に作れるを證すべく高は傳寫の誤たり。

玉篇には隄高也とあり、田氏は是をも京の誤とせんとするか。

陷 卷四十七卷五十七に引ける皆、從高而下也に作る。

玉篇も今本説文と同じく高下也に作れるが音義の文叟に善し。

結 卷九十六に引きて繭滓絰頭作囊絮に作る、この字の説解傳寫に譌多く確解を得難けれど之を存す。

確解を得がたきも今本説文の誤れるは倍々證せらる。

綜 卷四十七卷五十四卷八十九卷十四に引きて皆機縷持絲交者曰綜に作れり。案するに玄應音義に説文の機縷也謂機持絲交者也を引けば段氏は謂字以下七字は注の語たらんと云へるが、慧琳各卷引く所亦此の如くなれば確に玄應の加ふる所に非じ。

玉篇引く所も音義と合ふ。

經 卷一卷五卷三十二卷五十卷五十一卷六十九に引きて皆約也に作る。

玉篇も約也とあり。

締 卷八十卷八十三卷八十五卷八十七卷八十八に引ける皆大徐本に同じ。

之によりて知りぬ玉篇に引けるに結字なきは前文の王逸曰締結也に譲れるを。

繒 卷二十卷廿二卷四十二に皆帛之總名の一語あり。

玉篇も帛總名也とあり。

綺 卷一卷八卷二十卷八十五に引ける皆有文繒也に作る。

玉篇も同じ。

繒 卷八十一に引きて帛作赤白色曰繒に作るに大徐本に白字なし。案するに後漢書蔡邕傳の注に説文赤白色也を引き、玉篇亦繒帛赤白に作れば慧琳が據れる古本に白字

の尙未だ奪失せられざりしを證すべし。

玉篇に繒は帛赤白とありとは宋本なり。田氏の書、吾が大正十三年に成りたれば原本玉篇を用ひらるゝに何の不自由も無きに、なほ宋本に依られしは全書一律ならぬを嫌はれたるものか。されど宋本によりて慧琳の據れる古本を推論すること果して如何。此の繒字も原本玉篇には帛赤色也(亦是赤の誤なり)とありて大徐本と同じきこと知らるゝなり。蓋し繒には赤と赤白との二義ありとせざるべからず。後漢書の朱景王杜馬劉傳堅馬傳の注には繒赤色とあれば原本玉篇大徐本も妄ならず、蔡邕傳の注南都賦の注一切經音義相同じければ繒赤白色も亦正しきなり、随つて段氏の云帛赤白皆誤、赤白則爲下文之紅矣と云へるも田氏の之を斥くも齊しく擔板の見なり。

緹 卷九卷十卷九十八卷九十九に引けるは皆帛赤黄色なるに、大徐本は帛丹黄色に作る。

玉篇にも赤黄色とあり。

纁 卷八に引きて淺也に作り、大徐本には帛雀頭色一曰微色々如紺纁淺也に作る。鄭珍以爲らく「纁篆は緺篆の誤たり、下の纁淺也云々こそ乃ち纁字の篆の解と。今證するに慧琳の引く所を以てすれば一字の帛雀頭色云々の義に及ぶなし、鄭説是に近し。

玉篇に帛雀頭色等の解あり、琳は偶その中の淺也の一解を引きたるのみ、此に由りて琳見る所の説文に他解なしといふべからず。鄭珍その説文逸字に於て此の注の属文疑ふべし、一曰微黒色が是一義なれば纒淺也又一義なれば一曰の字を加へざるべからず、且た當に一曰淺也と云ふべくして別に纒字を提して纒淺也と曰ふべからずと云へるに、玉篇には淺也に一曰ありて纒字なく、正に其の求むる所に合へるも亦信従すべき所以。

縹 卷九十四には繁采飾也と引き卷七十七には繁也采飾也と引く。

玉篇にも飾とあり。

綵 卷九十九に説文を引きて纒冠纓也と謂ふ。

玉篇に纒冠纓也とあるは最も佳、纒は纒の誤。大徐本に系に作るはわろし。

總 卷十九に引きて蜀白細布也に作る。

玉篇には蜀細布也とありて白の字なし。

紵 卷五十九に引いて細者爲紵布白而細曰紵に作り、卷五十二に引いて布細而白者也に作り、卷八十一に引いて細者也に作る。大徐本に細者爲紵粗者爲紵に作る。按ずるに周禮典采注に白而細疏曰紵と、此紵は細者たるの證。玄應慧琳引く所大同小異にして皆粗爲紵に作らず、今本顯に竄改ありて古義と合はざるを證すべし。

玉篇には鄭注を引きて白而細曰紵に作る。

一切經音義に引く所多く玉篇と相合ふこと各條に注せるが如し。則ち玉篇を通じて説文舊本の眞を討ぬるは今日にありて最も有功なる方法なれば、この玉篇と説文との比校の一節長きに失したる如きも亦讀者の恕し給ふ所たらん。

又原本に引く所によりて今本方言の訛を訂すべきもの數條を王國維の「書郭注方言後」の第三に擧げられたれば、今之を引かん。

卷一の慎濟溼憂也自關而西云々謂之溼 (注)溼者失意潛沮之名。

原本に之を引きて溼を濕に作り(荀子修身篇注にも同じ)又注の潛沮を慘沮とす。濕は古人皆他合反に讀めるが、今人も憂ふ場合に他合反の語あれば濕に作るを長せりとす。

卷三の膠譌詐也云々自關而東西或曰譌曰膠。

原本に之を引きて謬詐也に作り(爾雅序の釋文、玄應慧琳兩音義も同じ)又自關而東西或曰謬に作れば膠は訛れり(廣雅に謬譌詐膠欺也とある上三字は方言と同じ、膠字は或は他書より取り或は後人が譌本方言によりて辱入せしならん)。

卷六の紕維理也秦晉之間曰紕

原本に紕理也秦晉之間曰維宋鄭曰紕とあり。今本曰維宋鄭の四字を奪はれたれば宋

鄭の語は秦晉の語となれる上に雉の何語たるや知るべからず。

また攔鄴續也秦晉續折謂之攔繩索謂之鄴一節 孽楚謂之紉一節。

原本に鄴續也楚謂之紉と引き洪興祖の楚辭補注にも續楚謂之紉とあれば此二節は本
これ一節。

卷十三の扶護也 (注) 挾扶將護

原本に挾護也郭璞挾曰挾持護之也と引けるに玄應音義に挾護也と再出し廣雅の語も
之と同じければ方言の扶は挾に作るべく注の扶字に涉りて譌れるなり。

また餌謂之饅。

原本食部饅に方言餌謂之饅と引き廣韻集韻亦饅餌也とあり。原本食部に饅字なくし
て大廣益會本に始めて之あれば六朝には尙饅字なかりしなり。

卷一の慧秦謂之謾の注に謾訛大和反謾莫鍼反又亡山反。

原本に秦晉謂慧爲謾郭璞曰言訛謾也とあるは舊本訛謾に作れるにて、さればこそ先訛
を音して後に謾を音したれ。楚辭惜往日に或訛謾而不疑。

また烈枹餘也の注に謂烈餘也。

原本に之を引きて謂殘餘也に作る。慧琳音義にも枹謂殘餘也と引く。

卷二の揄鋪云々詭也の注に謂物之行蔽也。

原本に謂物之行蔽者也と引くは今本の蔽が蔽の譌。周禮司市の注に害々於民謂物行
沾者沾之言苦不巧緻也とあれば行蔽とは猶行沾の如し。今人も貨物の次劣なるを行
貨といふは詭の義と合ふ(爾雅の下の注にも行蔽とあり)
すべて十條以て本節の殿となす。

6 字林との比較

唐の六典に曰はく凡そ明書には說文字林を試みて訓詁に通じ兼ねて雜牀を會するを取り
て此を通と爲すと、字林は說文と相並びて賁人必修の書たりき。

字林すべて七卷、晉の義陽王の典祠令任城の呂忱の撰(忱は太始中の人たらん事本章1に云
へり、太始は玉篇の成れるより約三百年前)。今傳本なく、僅に清の任大椿の考逸本あるのみ。

考逸本によりて原本玉篇に存する者を求むれば百廿一字を得。其の同じからぬ

字林	方味反		
玉篇	甫違反	液	音限石聲
		津也	胡簡反石也

の類なるが、音は特に甚しく音切を付せる五十四字の中全同は三字に止まりてその他は四聲
を異にするか、分韻を殊にするかなり。よつて思ふに顧氏は江南の呂氏は江北の人たる爲に
自ら此の相違を來したるに非ざるか(南北の音のこと本章3に)。果して然らば玉篇が字林を

一引せぬも、玄應の音義に玉篇を引くこと僅に二回に止まるも各その音を信受せざりし爲なるなきか。則ち其の分量と云ひ翔實なると云ひ字書としての價值は玉篇復に字林に優れるに、唐の制度なほ説文字林を以て貢舉に臨みたる亦南北の見に圍せられし沙汰といふべし。あゝ出自によりて其の眞價を認識せられずして枉屈に泣くもの豈ひとり玉篇のみならんや。顧氏のみならんや。

7 篆隸萬象名義との比較 附新撰字鏡との關係

唐代の韻書には切韻、唐韻あり、字書には武后字海、唐志に一百卷、開元文字音義、同に三十卷ありたりと云へど今日に完存するなし。幸に我に空海の篆隸萬象名義三十卷ありて頗る玉篇に近く、楊守敬の如きは

今此の書(萬象名義)を以て五殘卷(玉篇の)と校するに每部所隸の字は一々相合して絶えて増損凌亂の弊なく、且つ全部に一の殘闕なし云々。若し此の書に據りて校刻して世に餉らば直に一部の顧氏原本玉篇に當つるも可なりとまでも其の日本訪書志に述べたり。

しかばあれど此く斷言するべく兩者は全同に非ず。玉篇に或舛の多きは既に述べしが萬象名義は多く之を收めずして言部にて例すれば玉篇に存する或舛二十二字の中七字は名義

の解釋中に引けるも他は之を闕けり。

部首の立て方も萬象名義は五百四十一部なるが、之には自の字複出すれば實は五百四十部なり、乃ち之を玉篇宋本によるの五百四十二部に比すれば二部少き理とならん。且その次第に於ても玉篇と參差せる所六ヶ所に上れり。

各字に附せる音切を見るに玉篇の兩音以上あるもの萬象名義は毎にその一に止むるの外、同じからぬも往々にして存せり。

玉篇	詡	呼雨反	詖	許爰反	詑	胡典反
名義	詡	呼甫反	詖	許園反	詑	何典反

又各字の解は萬象名義は單に一字を出せるのみにて玉篇の如く委曲を盡さず

詑 魚寄反：：周易曰堅柔之際詑無咎也王弼曰議猶理也毛詩宜照詑問傳曰詑善也禮記曰詑者宜也：：今並爲義字在我部

と玉篇にあるを採りて 宜寄反、理、善、義、宜 の七字とせるの類なり。而も玉篇に存せぬ訓を附せる

詑	詑	詑	詑	詑
詑	詑	詑	詑	詑

の如きもの往々にして有れば、原本玉篇に寫脱せしに非ざる以上、他より之を採れりと云ふべ

きならん。

萬象名義は今日高山寺の一本を傳ふるのみなるが、其の傳寫本なるべきは著者別に考ふる所あり。知らず原本にても上の如く論定するを得るや否やを。

新撰字鏡十二卷は昌泰醜御宇の初中に僧昌住の撰せし所。其の自序に「玉篇及び切韻を得て脱泄の字を摺加して更に花麗を増す」とありて切韻はまざくと之に據り之を引けども憾むらくは玉篇は然、露はに出されざるを。而も其の無かるべからざること明かなれば相對校するに、字鏡の

糸 莫歷天亡の誤ならん狄二反

系 奚計反繼也繫也

銚 古環反以絲貫杼也

彝 尊也常也法也器也

繫 於奚反樞也小也兒の誤ならん次褰衣緝也

は玉篇の解に存する者たれば之より取りたりとするは不可なからん。而も原本玉篇の存せぬ文字につきては之を追跡するに由なし。著書おの／＼舛ありと云へども昌公當年玉の一字を附するに吝かならざりしならんには後人を沾溉する果して幾ばくそ。